『東京大学言語学論集』31 (2011.9) 235-268

「阿蘭那經」に比定された *SHT* 所収梵語断片について

荻原　裕敏

キーワード: トカラ語　«*Udānālaṅkāra*»　「阿蘭那經」　SHT1324 + 1331　SHT1720

要旨

ドイツ所蔵梵語断片、SHT1324 + 1331 及び SHT1720 は、それぞれ *SHT (VI)・(VII)* で転写が出版された際、漢訳『中阿含經』「阿蘭那經」に比定された。本稿では、この梵語断片の新たなパラレルとして、『六度集經』「阿離念彌經」とトカラ語 B 断片の存在を指摘する。また同時に、これらのパラレルとの比較を通じて、この梵語断片に対応するトカラ語 B 断片の、トカラ語«*Udānālaṅkāra*»の成書過程に関する筆者の推定に於ける位置づけと、それを手がかりとして窺う事ができるトカラ仏教に伝えられたと推定される阿含経典の問題について検討する。

1．導入

トカラ語仏典中に、説一切有部に属する仏典である«*Udānavarga*» (以下、Udv.とする) に対する注釈書として«*Udānālaṅkāra*» (以下、UA とする) という題名の文献が存在している事は良く知られている[1]。この文献は Udv.の詩節に対して、その因縁譚や教理的解釈を施した韻文作品であるが、これらのパラレルが梵語・パーリ・漢訳仏典などに部分的に見られる点は、先行研究が既に指摘している[2]。このトカラ語による注釈書 UA の原典について、校訂本が出版された際、Sieg は「*Dharmasoma* という名前の著者によって著された梵語文献の翻訳」[3]と考えられると指摘した。これに対して、筆者は、UA に *Avadāna* が引用されている点に注目し、そのパラレルとの比較を通して、この *Avadāna* が編纂過程で他文献から引用されたものであり、本来、当該詩節と結びついていた物語に置き換えられたと推定すると同時に、トカラ語の UA 全体に対応する梵語原典は存在せず、トカラ語訳されて引用された Udv.の個々の詩節と、それに付随する因縁譚などの注釈の内、その一部のものについては、異なった文献・伝承から引用され、UA 作成の過程に於いてトカラ仏教の側で組み合わされたものであるとする仮説を提出した[4]。

その後関係資料を調査する段階で、筆者はドイツ所蔵の西域北道将来梵語断片中に、トカラ語の UA に関係づけられる断片が存在している点に気づいた。本稿では、この梵語断片の、これまでに指摘されていない二つのパラレルを新たに提出し、それらを比較すると同時に、その結果を手がかりとして窺う事ができるトカラ仏教に伝えられたと推定される阿含経典の問題に

---

[1] 本稿では、所謂「根本説一切有部」を含めた広義の有部の意味で、説一切有部という用語を使用している。
[2] *TochSprR(B) I*:3-80 [German translation] に付された記載、及び 百済 (1972) 、荻原 (2011)を参照。
[3] *TochSprR(B) I*: 5 [German translation] を参照。また Thomas (1983: 19-20) も梵語文献からの翻訳とする。ただし、両者は *Dharmasoma* の出自に関して意見を異にする。
[4] 荻原 (2011) を参照。

ついて検討する。

2.「阿蘭那經」に比定された *SHT* 所収梵語断片について

本稿で検討する *SHT* 所収の梵語断片は、ドイツ探検隊によって西域北道で発見された梵語写本に属するものであり、以下のものである[5]。

SHT1324 + 1331, cf. *SHT (VI)*: 81-82
SHT1720, cf. *SHT (VII)*: 143-144

これらの断片は、漢訳『中阿含經』所収「阿蘭那經」(T.01, no. 26, 682b10-684c14) に比定されたが[6]、SHT1324 + 1331 が出版された際には発見場所は不明であった。その後、SHT1720 が出版されるに及んで、この三点が同一の folio に属する点が指摘された。これにより、SHT1720 に記された T II S 75 という番号から、これらの断片は *Turfan* の *Sängim* で発見されたものと結論づけられる。*SHT (VII)*: 143 の記述に拠ると、これらの断片は *Schriftypus* VI に分類される *Brāhmī* 文字で書写されており[7]、SHT1720 が folio の紐穴周辺の部分に、SHT1324 + 1331 は、さらにその右の部分に位置する。両断片は直接には接合せず、その間に失われた部分の存在が指摘されている[8]。以下には、*SHT* で付された注釈中で提出された推定を加えた転写と「阿蘭那經」の対応箇所として指摘された部分を引用する[9]。

[SHT1324 + 1331 + 1720]

a

1 */// (bhi)kṣuṇ[ām] = upasthāna[ś]āl[ā](lāyāṃ) + + + + /// /// (antarākathā v)[i]prakṛtā ka[y](ā) + + + + + + ///*

2 */// .. .. ih = āsmākaṃ bhadanta saṃb[ah]u(lānāṃ) /// /// + + (saṃ)niṣaṃṇā[nāṃ] saṃ[ni](patitānām = .) ///*

3 */// (antarākathāsa)mu- O dāhāra alpaca[m = e](va jīvitaṃ manuṣyāṇāṃ) /// /// + (p)ūrvavad = yāvat = kalyāṇacary(ā)[y](āṃ) id. ///*

4 */// .. bhi- O kṣuṇām = upasthāna[ś](ālāyāṃ) /// /// + tānām = anta[rā]kathā viprakṛtā | anayā vā ///*

---

[5] *SHT* 所収断片中、「阿蘭那經」に比定にされた断片は、この三点以外にも、*SHT (VII)* で出版された SHT1770cA 及び 1770dA の二点が挙げられるが、発見場所や対応箇所が本稿で検討する断片とは異なっているため、本稿では直接の検討対象とはしない。

[6] *SHT (VI)*: 81 では、パーリ仏典の«*Araka-sutta*»に対応する点も指摘されている。

[7] 西域北道将来の梵語断片で使用される *Brāhmī* 文字については、Sander (1968: 181-183, 1986) を参照。

[8] *SHT (VII)*: 291 を参照。

[9] ここでは、これらの断片を一つの folio に接合した形で提示する。なお、筆者は、これらの梵語断片の原文書を調査する機会を得られていないため、断片に関する全ての情報は上記の *SHT (VI)*・*(VII)* に拠っている事をお断りしておく。また、以下に検討するパラレルとの対応を見る上で重要な部分を下線で示す事とする。

5 /// *(saṃni)ṣa(ṃ)ṇā saṃnipatitā e(va)m = etad = bhikṣava[ḥ]* + + /// /// + *manuṣyāṇāṃ pū[rva]vad = yāvat = kalyāṇa[cary]ā[y]āṃ* ///

6 /// *(aśī)tivarṣasahasrāyu(ṣ)[o ma]nuṣyā* .. + + + + /// /// *yāṃ mahad = eva sū[tr]aṃ* | *aśitir = [varṣa](sahasrāyuṣo manuṣyāḥ)* ///

b

1 /// *(āsī)t*[a] = *k[au]ravyo nāma cakravart(ī cā)turantyāṃ [v](ijetā)* + /// /// + .= *(a)dhyāvasitā vā taṃ [r]ājñaḥ kauravasy = ā* .. + + + ///

2 /// *(nya)[g](r)[o]dharājā babhūva* / *supratiṣṭhitasya [ny](agrodharājñaḥ)* /// /// + *(brā)hmaṇamahāśā[laḥ]* .. .. *[mā]trāṇi māṇavaśa[t](asahasrāṇi)* ///

3 /// + + *ti a-* O *th = āranemino*[b] *brahma(nasya)* /// /// *(raha)sigatasya pratisaṃlīnasy = aivaṃ cetaḥparivi(tarka udapādi)* ///

4 /// + + *[manu]-* O *ṣyāṇāṃ pūrvavad = yā[va](t = kalyāṇacaryāyāṃ* /// /// *(keśaśma)śrūṇy = avatārya kāṣāyāṇi vas(tr)ā[ṇy] = āc(ch)ā(dya)* ///

5 /// + *(ana)[gā]rikaṃ pravrajeyaṃ* | *ath = āranemi*[b] *b[r](āhmano)* /// /// + + *(katha)[ya]ti* | *ya[t = kh]alu mā(ṇavāḥ)* + + + + + ///

6 /// *(p)ūrvavad = yāvat = kalyāṇacar[y](āy)[āṃ]* + + + + /// /// + *(kāṣā)[y](ā)ni vastrāṇy = [āc](chādya)* + + + + + + ///

[注釈]

a: 恐らく *(āsī)t* と推定される。

b: この物語の主人公の名前を、*SHT (VII)*: 144 Anm. 9 及び 12 では、*araṇemi* と訂正するように指示しているが、次節に述べるように、対応するトカラ語 B 断片では、この梵語断片同様に *aranemi* としており、訂正の必要は認められない。

[和訳][10]

a

1 /// 比丘達が講堂で /// /// 議論をしていました。どのような ///

2 /// 世尊よ。ここで私達は多くのものが /// /// 座って集まり ///

3 /// 議論をしておりました。人々の命は実に短い。/// /// 以前と同様に善行に ///

4 /// 比丘達が講堂で /// /// 議論をしていました。悪行 ///

5 /// 座って集まり ··· このように比丘達は /// //// 人々の ···以前と同様に善行に ///

6 /// 人々は八万年の寿命で /// /// 重要な聖典 ··· 人々は八万年の寿命で ///

b

1 /// *Kauravya* という名前の転輪王、大地の支配者、 ··· がいました。/// /// *Kauravya* 王

[10] ここでは煩雑になるのを避けるため、推定された箇所も ( ) で示さない。

の ･･･ が住んでいました。///

2 /// *Nyagrodha* の木の王がありました。*Nyagrodha* の木の王、*Supratisthita* には ///

3 /// さて、バラモンの *Aranemi* ///　/// 人里離れた場所に行き暮していましたが、以下のような考えを抱きました。///

4 /// 人々の ･･･以前と同様に善行に ///　/// 頭髪を落として、袈裟を着て ///

5 /// 私は出家しよう。さて、バラモンの *Aranemi* は ///　/// 語ります。若者達よ。///

6 /// 以前と同様に善行に ///　/// 袈裟を着て ///

『中阿含經』卷 40 「阿蘭那經」

「爾時。諸比丘於中食後集坐講堂。論如是事。諸賢。甚奇。甚奇。人命極少。要至後世。應作善事。應行梵行。生無不死。然今世人於法行。於義行。於善行。於妙行。無為無求。彼時。世尊在晝行處。以淨天耳出過於人。聞諸比丘於中食後集坐講堂。論如是事。諸賢。甚奇。甚奇。人命極少。要至後世。應作善事。應行梵行。生無不死。然今世人於法行。於義行。於善行。於妙行。無為無求。世尊聞已。則於晡時從燕坐起。往詣講堂。在比丘眾前敷座而坐。問諸比丘。汝論何事。以何等故集坐講堂。

時。諸比丘白曰。世尊。我等眾比丘於中食後集坐講堂。論如是事。諸賢。甚奇。甚奇。人命極少。要至後世。應作善事。應行梵行。生無不死。然今世人於法行。於義行。於善行。於妙行。無為無求。世尊。我等共論此事。以此事故集坐講堂。

世尊歎曰。善哉。善哉。比丘。謂汝作是說。諸賢。甚奇。甚奇。人命極少。要至後世。應作善事。應行梵行。生無不死。然今世人於法行。於義行。於善行。於妙行。無為無求。所以者何。我亦如是說。甚奇。甚奇。人命極少。要至後世。應作善事。應行梵行。生無不死。然今世人於法行。於義行。於善行。於妙行。無為無求。所以者何。乃過去世時。有眾生壽八萬歲。比丘。人壽八萬歲時。此閻浮洲極大豐樂。饒財珍寶。村邑相近。如鷄一飛。比丘。人壽八萬歲時。女年五百乃當出嫁。比丘。人壽八萬歲時。唯有如是病。謂寒熱大小便欲不食老。更無餘患。

比丘。人壽八萬歲時。有王名拘牢婆。為轉輪王。聰明智慧。有四種軍。整御天下。由己自在。如法法王成就七寶。彼七寶者。輪寶象寶馬寶珠寶女寶居士寶主兵臣寶。是謂為七。千子具足。顏貌端正。勇猛無畏。能伏他眾。必當統領此一切地。乃至大海。不以刀杖。以法教令。令得安隱。比丘。拘牢婆王有梵志。名阿蘭那大長者。為父母所舉。受生清淨。乃至七世父母不絶種族。生生無惡博聞總持。誦過四典經。深達因緣正文戲五句說。比丘。梵志阿蘭那有無量百千摩納磨。梵志阿蘭那為無量百千摩納磨住一無事處。教學經書。

爾時。梵志阿蘭那獨住靜處。燕坐思惟。心作是念。甚奇。甚奇。人命極少。要至後世。應作善事。應行梵行。生無不死。然今世人於法行。於義行。於善行。於妙行。無為無求。我寧可剃除鬚髮。著袈裟衣。至信捨家無家學道。於是。梵志阿蘭那往至若干國眾多摩納磨所。而語彼曰。諸摩納磨。我獨住靜處。燕坐思惟。心作是念。甚奇。甚奇。人命極少。要至後世。應作善事。應行梵行。生無不死。然今世人於法行。於義行。於善行。於妙行。無為無求。我今寧可剃除鬚

髮。著袈裟衣。至信捨家無家學道。諸摩納磨。我今欲剃除鬚髮。著袈裟衣」

(T.01, no. 26, 682 b13-683a8)

3. SHT1324 + 1331 + 1720 のパラレルについて

前節で紹介した梵語断片のパラレルとしては、*SHT* で既に指摘されている「阿蘭那經」やパーリ仏典の«*Araka-sutta*»以外に、これまで指摘されていない以下の二つが挙げられる。

[漢訳仏典]

『六度集經』所収「阿離念彌經」(T.03, no. 152, 49b24-50b29)

[トカラ語 B 断片]

トカラ語 B3a5-b8

トカラ語 B 断片は、Udv.に対する注釈書である UA に属する部分であり、Udv. I 13-14,16 に対する因縁譚として与えられている[11]。以下には、「阿離念彌經」とトカラ語 B の対応箇所を挙げる。なお、トカラ語 B のテクストは transcription によって表記したものであり、*TochSprR(B) I* 及び Thomas (1983) で提出された推定も加えている[12]。

[漢訳仏典]

『六度集經』巻 8 「阿離念彌經」

「聞如是一時佛在舍衛國優梨聚中。時。諸比丘。中飯之後坐於講堂。私共講議。人命致短。身安無幾。當就後世。天人眾物無生不死。愚闇之人。慳貪不施。不奉經道。謂善無福。惡無重殃。恣心快志。惡無不至。違於佛教。後悔何益。佛以天耳。遙聞諸比丘講議非常無上之談。世尊即起至比丘所。就座而坐。曰。屬者何議。長跪對曰。屬飯之後。共議人命恍惚不久當就後世。對如上說。世尊歎曰。善哉善哉。甚快。當爾棄家學道。志當清潔。唯善可念耳。比丘坐起當念二事。一當說經。二當禪息。欲聞經不。對曰。唯然。願樂聞之。

世尊即曰。<u>昔有國王名曰拘獵。其國有樹。樹名須波桓樹</u>。圍五百六十里。下根四被八百四十里。高四千里。其枝四布二千里。樹有五面。一面王及宮人共食之。二面百官食之。三面眾民食之。四面沙門道人食之。五面鳥獸食之。其樹果大如二斗瓶。味甘如蜜。無守護者亦不相侵。時。人皆壽八萬四千歲。都有九種病。寒熱飢渴大小便利愛欲食多年老體羸。有斯九病。女人年五百

---

[11] *TochSprR(B) I*: 6 Anm. 2 [German translation] は、「阿離念彌經」がトカラ語 B3a5-b8 に対するパラレルである点を初めて指摘した。同時に、*TochSprR(B) I*: 7 Anm. 8 [German translation] は、トカラ語 B3b5-6 の詩句がパーリ仏典の«*Araka-sutta*»にも見られる点を指摘しているが、「阿蘭那經」には言及していない。なお、*TochSprR(B) I* の改訂版を目指した Thomas (1983: 26-27 [transliteration], 143-146 [commentary]) には、対応するパラレルについて新しい情報は与えられていない。

[12] Thomas (1983: 26-27 [transliteration], 143-144 [commentary]) を参照。なお、この断片は現在失われており、原文書を調査した上での転写を与える事はできない。なお、トカラ語 B の UA の最新の転写としては、玉井 (2011: 83-85) が利用可能である。ただし、写真が公開されていない部分については、*TochSprR(B) I* の読みを採用しており、Thomas (op.cit.) を参照していないため、筆者のテクストとは相違する箇所がある事をお断りしておく。

歳乃行出嫁。時有長者名阿離念彌。財賄無數。念彌自惟。壽命甚促。無生不死。寶非己有。數致災患。不如布施以濟貧乏。世榮雖樂。無久存者。不如棄家。捐穢濁執清潔。被袈裟作沙門。即詣賢眾受沙門戒。凡人見念彌作沙門。數千餘人。聞其聖化皆覺無常。有盛即衰。無存不亡。唯道可貴。皆作沙門。隨其教化。

念彌為諸弟子説經曰。人命致短。恍惚無常。當棄此身就於後世。無生不死。焉得久長。是故當絶慳貪之心。布施貧乏。撿情攝欲。無犯諸惡。」　(T.03, no. 152, 49b25-c29)

[トカラ語Bテクスト][13]

B3a5-b3

a

5 *n$_a$nok alyek (preke śrāvast)n(e po)yś[i] (käṣṣi mäskīträ m)rgārañ stāṅkne kreṃnt ‡ ṣamyeṃ māka ṣamāni aplāc ākteke te to-*

6 *tka śaul śāmnaṃts ‡ wnolmi (tan)e snai spelke mā mrau[ska]lñ = ersenträ 90 klyauṣa pūdñäkte plā[c] (cainats) ñäkcyane (klautsnesa śem i)[p](r)e(rm)eṃ[a] [c]e$_u$ ykene ‡ preksa ṣamāneṃ pudñäkte mäktā$_u$ plācsa ṣmīcer yes a-*

7 *kṣāre poyśiṃtse ‡ palāteme makāykne käṣṣī n[auṣa]ññai ṣp plāc akṣām = aurtsesa ‡ (kau)ra[v]ye ñem [wa](lo ṣai tane jambudvipne 91) supratiṣthit ñem nigrot (ṣai) stanāṃts wlo cwi yapoyne piś āntsen[tsa]*

8 *w[r]otse ‡ śa(woṃ)n = okonta swāre ṣ ṣai (oko[b] mit ra)[m](t) śū[ke]ne w[r]occ = āntseṃ(ts) karākn(e) ‡ ṣem = ā(ntseme)ṃ [st](am)a(ntse[c] walo wcemeṃ wertsya tri)cemeṃ y[p]oyi ‡ ś[ta]rc = ān[ts]emeṃ ost[m]eṃ l[t](w)eṣ (p)iṅc = āntsemeṃ l(w)ā(sa)*

b

1 *92 mā śwoṃ (ā)lyauce okonta lwā[sa] (śwoyeṃ ce)w preke m[ā snai] p(e)le yāmṣyeṃ ‡ cwi lānte (no) omp brā(hmane aranemi[d] ñemtsa ṣai) aiś(au)my = (a)ñmāla[s]ke ‡ śāmna(ṃ)ts śaul ṣai ṣkas [t]mane p[i]k$_u$la a(ra)-*

2 *nemiñ tākā keś tättälñe ‡ mäntarṣke(ṃ)[e] śaul śāmnats ñke mā = rsenträ mrauskalñe 93 sū präskau (śau)ltsa lac o[s]tm(eṃ kaṣār ausu āśc märtkau[f] mamrau)skaṣ palskosa ‡ snai ke(ś) y(ä)ltsenma tmanenma aranemiṃmpa la-*

3 *teṃ ostmeṃ wnolmi ‡ nigrot (s)t(ā)[m] ñ[o]r ṣek su mäskīträ omp akalṣlyeṃts pelaikn = āksaṣṣi (‡) ompakwättñe śau[l](antse yāmṣate su ai)ś[ai] 94*

---

[13] 本稿で使用する表記法は、基本的に *TochSprR(B) I* で採用されている方法に従った。
[ ]: 不確かな箇所
( ): 校訂者及び筆者によって推定された箇所
–: 欠けている akṣara
.: 欠けている子音、若しくは母音
= : sandhi.

[注釈]

a: Thomas (1983: 143) の当該箇所に対する注釈を参照。

b: Thomas (1983: 144) の当該箇所に対する注釈を参照。

c: Thomas (1983: 144) の当該箇所に対する注釈を参照。

d: *TochSprR(B) I*: 6 Anm. 13 及び Thomas (1983: 144) では、*araṇemi* と再建するが、この断片中には、*arāṇemi* ではなく *aranemi* という形式しか出現しないため (cf. 3b1-2, 2, 4, 8)、ここでは *aranemi* と再建する。前節で挙げた SHT1324 + 1331 + 1720b3 及び b5 も参照。

e: *TochSprR(B) I*: 11 Anm. 13 [transliteration] で指摘されているように、ここでは単数形が要求され、以下の和訳ではそのように修正して解釈した。

f: SHT1324 + 1331b4: */// (keśaśma)śrūṇy = avatārya kāṣāyāṇi vas(tr)ā[ṇy] = āc(ch)ā(dya) ///* に基づいて推定した。なお、梵語と上で推定したトカラ語 B では語順が異なっているが、この *pāda* に要求される音節配置 (7 = 4×3) に基づいている[14]。

[和訳]

a

5 また或る (時、師) 仏陀は (*Śrāvastī* にある) *Mṛgāra* の立派な宮殿に (いました)。多くの僧侶たちが話をしていました。

6 驚くべき事だ、人々の命が短い事は。しかし、ここに於いて人々は努力せず、厭世観も起こさない。[90] 仏陀は (彼らの) 話を神の (両耳で) 聞き、(空から) この場所に (来ました)。仏陀は僧侶達に尋ねました。あなた達はどんな話をしていたのですか。

7 彼らは仏陀に語りました。仏陀は様々に彼らを賞賛し、詳細に昔の話を語りました。(この閻浮洲に) *Kauravya* と言う名前の王が (いました)。[91] *Supratisthita* という名前の *Nyagrodha* があり、その国において木々の王であり、五本の枝を持つ大きなもの (でした)。

8 彼らは果実を食べていましたが、大きな枝についた枝にある果実は味が甘く、(蜜のようでした)。木の一つ目の枝からは (王が、二つ目からは王に仕える者達が)、三つ目からは国の人々が、四つ目の枝からは出家した者達が、五つ目の枝からは動物達が。

b

1 [92] この時、動物達はお互いに食べ合う事なく、果実を (食べていました)。彼らは不法な行為をしていませんでした。さて、この王の下に、聡明で慈悲深い (*Aranemi* という名前の) バラモンが (おりました)。人々の命は六万年でした。

2 *Aranemi* は考えました。今、人々の人生はひどいものです。彼らは厭世観を起こさない。[93] 彼は命を恐れ、厭世観を抱きつつ、(袈裟を着て頭を剃り) 出家しました。何千万という人々が、彼と共に出家しました。

---

[14] この *pāda* に要求される音節配置については、Thomas (1983: 275-276) を参照。

3　彼は常に *Nyagrodha* の木の下にいました。そこで彼は弟子達に法を語っていました。彼は命の不確かさを (扱いました)。

上に挙げた「阿離念彌經」とトカラ語 B3a5-b3 は、梵語断片中にありながら、「阿蘭那經」には言及されていない *nyagrodha* の木と**supratiṣṭhita*-に言及するだけでなく[15]、主人公の名前が *Aranemi* となっている[16]。この二点より考えて、SHT1324 + 1331 + 1720 は「阿蘭那經」よりも、上で指摘したように、「阿離念彌經」とトカラ語 B3a5-b3 により近い内容を持つと言える[17]。以上のように、当該の梵語断片は、対応から見て「阿離念彌經」に比定する方が妥当であると見られるが、以下に論証するように、トカラ語 B 3a5-b8 は『中阿含經』「阿蘭那經」と同一の系譜に属すると見られる点、及び、これまでに知られているトカラ語の UA のパラレルは、部派を確定する事ができるものについては、説一切有部の文献に関係づけられる点から[18]、この梵語断片が東トルキスタン有部所伝の阿含経典に属していた可能性も排除されない[19]。

4．トカラ語の UA との比較

先にも言及したように、トカラ語 B3a5-b8 は、Udv. I 13-14, 16 に対する因縁譚として与えられている。前節で示したように、この部分に対応するパラレルとして、以前には知られていなかった「阿蘭那經」とパーリ仏典の«*Araka-sutta*»が付け加えられた。そのため、これらを含めた再検討が必要とされる。ここでは、当該仏典に説かれている韻文に注目してパラレルとの比較を行う。比較を行う際に利用する資料は、以下の三種類である。

A. 『六度集經』「阿離念彌經」
B. 『中阿含經』「阿蘭那經」
C. パーリ仏典«*Araka-sutta*» (AN IV: 136-140)

なお、比較の対象とするのは上で引用した部分に続く人生の儚さについて主人公が説いた内容であり、本稿で利用したテクスト全体については、本稿末尾の[Texts]を参照されたい。まず、注釈が付される対象である Udv. I 13-16 を引用する[20]。

---

[15] 「阿蘭那經」が、*nyagrodha* の木と**supratiṣṭhita* に関する言及を欠く点については、*SHT (VII)*: 144 Anm. 7 で指摘されている。

[16] トカラ語 B3a5-b3 では、*Aranemi* を梵語断片や「阿蘭那經」同様にバラモンとするが、「阿離念彌經」では、「長者」としている。ただ、この物語の主人公の名前に関しては、パーリ仏典の«*Araka-sutta*»に先行する«*Sunetta-sutta*» (AN IV: 135-136) にも注意すべきであろう。即ち、«*Sunetta-sutta*»には、教えを説く人物として *Araka* だけでなく *Aranemi* も登場する。この点を考慮に入れると、*Araka* と *Aranemi* という名前については、入れ替えが行われた可能性も否定できない。

[17] SHT1324 + 1331 + 1720 と「阿蘭那經」は、人々の寿命が八万年とするのに対して、「阿離念彌經」は八万四千年、トカラ語 B3a5-b3 は六万年としており、相違が見られる。

[18] 百済 (1972) 及び荻原 (2011) を参照。

[19] 東トルキスタン有部が、彼ら独自の伝承に基づく阿含経典を保持していたとされる点については、榎本 (1982, 1984) を参照。

[20] Bernhard (1965: 99-100)。

Udv. I 13 : *yathāpi tantre vitate yad yad utaṃ samupyate* |
alpaṃ bhavati vātavyam evaṃ martyasya jīvitam ||
Udv. I 14: *yathāpi va* – – – – – – – – – – – – –|
– – – *ghatano bhavati evaṃ martyasya jīvitam* ||
Udv. I 15: *yathā nadī pārvatīyā gacchate na nivartate* |
evam āyur manuṣyāṇāṃ gacchate na nivartate ||
Udv. I 16: *kisiraṃ ca parittaṃ ca tac ca duḥkhena saṃyutam* |
udake daṇḍarājīva kṣipram eva vinaśyati ||

[トカラ語 B 3b3-7]

śaul attsaik totka śāmnaṃts ñke wrīyeṣṣe pältakwä atyaṃts a(k)e[nta]sa ‡ (kantw = arṣ)[ā]klaṃts ramt klautso ramt oṅkolmantse wāska(mo) – – .k. – [m]ā – (‡) – – – – – – (a)kṣāme aranemi käṣṣī sw akalṣlyeṃts ‡ klautsne = naiśai pepīltso śau(l)mpa mā spänteträ 95

mäkte ña(re) [tn]e pänno[wo] kos sarkimpa w(ā)p(a)trä (tot)k(a tot mäsketrä ‡ ma)nt śāmn(aṃ)ts śaul tne kos śaiṃ ksa kaunaṃts meña(ṃ)ts kätkorne kärsnātr attsaik postäṃ ‡

mäkte kautsy = akemane wnolme (tne) kos saikaṃ ṣikont = e(r)k(e)nmaś ‡ tot srūkalñe(ś mäs)[k](e)t]rä[a] mant śāmnaṃts[b] [śau]l (nakṣträ) 96

wai(me)netse śaul totk = āttsaik su ṣp laklempa rittowo mā no wnolmy aikenträ ‡ śakātaṣṣa sā$_u$ sälyye mkt[e] (wa)rne na[kṣtä]r ṣe prentse mant śāmnaṃts śaul nakṣtä[r] (‡

mā) stemye ksa (ne)säṃ śaulantse (la)[k]l(e) snaits(ñ)e tetkāk ṣp [känma]ṣṣäṃ ‡ karsnaṃ pärmaṅk ṣañ śāmnaṃts mäntaṃ pw akālkänta 97

(toṃ a)[ra]nemi ś(l)okanma ākṣ = ākalṣ(ly)eṃ[ts] ce(w pr)e(ke tn)e(k[c] māka mrau)s[k]ā(nte) ‡ ṣkas tmāne pik$_u$[la] śau[l] (ś)āmnaṃts attsaik tot[ka] ceṃts ynāñ[m] ṣai lateṃ ost(m)eṃ snai(tsñ)e ‡ ña[k]e [ś]au[l] attsai[k] to[t](k)[ā] (yärm s)e

[注釈]

a: Thomas (1983: 145-146) の推定に従った。

b: Udv. I 14 に対応するが、Schmithausen (1970: 78) に拠れば、この箇所は、Rezension 1 と Rezension 2 で、以下のようにテクストが異なっている。

Rez. 1: *eva(ṃ) martyasya jīvitam*

Rez. 2: *martyānāṃ jīvitaṃ tathā*

トカラ語 B のテクストでは、*śāmnaṃts śaul*「人々の (*śaumo* 'person, man'の複数属格形) 命」としており、形式的には Rez. 2 に一致するが、韻文の音節数の制約[21]という動機も否定でき

[21] トカラ語 B *śaumo* 'person, man'の属格形は、単数 (*śaumontse*) と複数 (*śāmnaṃts*) では一音節の差がある。

ず、どちらに一致するか、確定的な事は言えない。
c: Thomas (1983: 146) による推定を採用した。

[和訳][22]

人々の命は非常に短い。草の先端の水の滴（のように）。蛇の舌のように、象の耳のように素早い ・・・ かの師 *Aranemi* は、弟子達に語りました。注意深く両耳を傾けなさい[a]。命を信頼してはいけない。[95]

[13] 延ばされた糸が縦糸と織られていても、その間に残り僅かになってしまうように、人々の命は生きていても、日月が過ぎ去るうちに、ついには切られてしまう[b]。

[14] 殺害へと導かれている人が、一歩ずつ墓場へと歩を進めて、死へとたどり着くように、人々の命は消える。[96]

[16] 命は困難に満ち、実に短いものであり、また苦しみと結びついているが、人々はその事に気づかない。棒でできた線が一瞬にして水中で消えるように、人々の命も消える。

命は永続性を持たない。突然、苦しみや貧しさが訪れる。自分の親族の希望を切り、全ての望みを壊してしまう。[97]

Aranemi は、この時、これらの詩節を弟子達に語りました。ここに於いて、多くの者が厭世観を抱きました。人々の命は六万年でしたが、彼らにとっては、突然価値が少ないものとなり、貧しい生活へと彼らは出家しました。今や、この命はとても短い。

[注釈]

a: この箇所に在証される *pepīltso* については Winter (1962) や齋藤 (2006: 483) 及び Malzahn (2010: 712-713) を参照。

b: この詩節の後半は、以下に示す Udv. I 18 (Bernhard 1965: 101) の下線部と関係づけられるかも知れない。

atiyānti hy ahorātrā　jīvitam coparudhyate |
āyuḥ kṣīyati martyānām　kunadīṣu yathaudakam ||

「阿離念彌經」

「人之處世命流甚迅。人命譬若朝草上露須臾即落。人命如此。焉得久長。人命譬若天雨墮水泡起即滅。命之流疾有甚於泡。人命譬若雷電恍惚。須臾即滅。命之流疾有甚雷電。[16] 人命譬若以杖捶水。杖去水合。命之流疾有甚於此。人命譬若熾火上炒少脂著中。須臾燋盡。命之流去疾於少脂。[13] 人命譬若織機經緯。稍就減盡。天命日夜耗損若茲。憂多苦重。焉得久長。人命譬若牽牛市屠。牛一遷步。一近死地。人得一日猶牛一步。命之流去又促於此。人命譬 [15] 若水從山下。

[22] 和訳及び各テクスト中の波線部はこれらのテクストに共通した詩句であり、下線部は Udv.の詩句を示しており、左上に記した番号で対応を示している。

晝夜進疾無須臾止。人命過去有疾於此。晝夜趣死。進疾無住。人處世間。甚勤苦多憂念。人命難得。以斯之故。當奉正道。守行經戒無得毀傷。布施窮乏。人生於世無不死者。」

(T.03, no. 152, 49c29-50a16)

「阿蘭那經」

「復次。尊師阿蘭那為弟子説法。摩納磨。猶如朝露滴在草上。日出則消。暫有不久。如是。摩納磨。人命如朝露。甚為難得。至少少味。大苦災患。災患甚多。如是尊師阿蘭那為弟子説法。

復次。尊師阿蘭那為弟子説法。摩納磨。猶大雨時。滴水成泡。或生或滅。如是。摩納磨。人命如泡。甚為難得。至少少味。大苦災患。災患甚多。如是尊師阿蘭那為弟子説法。

復次。尊師阿蘭那為弟子説法。摩納磨。[16] 猶如以杖投著水中。還出至速。如是。摩納磨。人命如杖。投水出速。甚為難得。至少少味。大苦災患。災患甚多。如是尊師阿蘭那為弟子説法。

復次。尊師阿蘭那為弟子説法。摩納磨。猶新瓦杅。投水即出。著風熱中。乾燥至速。如是。摩納磨。人命如新瓦杅。水潰速燥。甚為難得。至少少味。大苦災患。災患甚多。如是尊師阿蘭那為弟子説法。

復次。尊師阿蘭那為弟子説法。摩納磨。猶如小段肉著大釜水中。下熾然火。速得消盡。如是。摩納磨。人命如肉消。甚為難得。至少少味。大苦災患。災患甚多。如是尊師阿蘭那為弟子説法。

復次。尊師阿蘭那為弟子説法。摩納磨。[14] 猶縛賊送至標下殺。隨其舉足。步步趣死。步步趣命盡。如是。摩納磨。人命如賊。縛送標下殺。甚為難得。至少少味。大苦災患。災患甚多。如是尊師阿蘭那為弟子説法。

復次。尊師阿蘭那為弟子説法。摩納磨。猶如屠兒牽牛殺子。隨其舉足。步步趣死。步步趣命盡。如是。摩納磨。人命如牽牛殺。甚為難得。至少少味。大苦災患。災患甚多。如是尊師阿蘭那為弟子説法。

復次。尊師阿蘭那為弟子説法。摩納摩。[13] 猶如機織。隨其行緯。近成近訖。如是。摩納磨。人命如機織訖。甚為難得。至少少味。大若災患。災患甚多。如是尊師阿蘭那為弟子説法。

復次。尊師阿蘭那為弟子説法。摩納磨。[15] 猶如山水。瀑漲流疾。多有所漂。水流速駛。無須臾停。如是。摩納磨。人壽行速。去無一時住。如是。摩納磨。人命如駛水流。甚為難得。至少少味。大苦災患。災患甚多。如是尊師阿蘭那為弟子説法。

復次。尊師阿蘭那為弟子説法。摩納磨。猶如夜闇以杖投地。或下頭墮地。或上頭墮地。或復臥墮。或墮淨處。或墮不淨處。如是。摩納磨。衆生為無明所覆。為愛所繫。或生泥犁。或生畜生。或生餓鬼。或生天上。或生人間。如是。摩納磨。人命如闇杖投地。甚為難得。至少少味。大苦災患。災患甚多。」 (T.01, no. 26, 683a28-c18)

AN IV: 7.2.2.10. *Araka-sutta* (AN IV: 136-140)

Seyyathāpi brāhmanā, tinagge ussāvabindu suriye uggacchante khippameva pativigacchati na ciratthitikam hoti, evam eva kho brāhmanā, ussāvabinadupamam jīvitam manussānam parittaṃ lahukaṃ bahudukkhaṃ bahūpāyāsaṃ, mantāya boddhabbaṃ. Kattabbaṃ kusalaṃ, caritabbaṃ brahmacariyaṃ.

Natthi jātassa amaraṇaṃ.

Seyyathāpi brāhmaṇā, thullaphusitake deve vassante udakabubbūḷaṃ khippameva paṭivigacchati na ciraṭṭhitikaṃ hoti, evam eva kho brāhmaṇā, udakabubbūḷupamaṃ jīvitaṃ manussānaṃ parittaṃ lahukaṃ bahudukkhaṃ bahūpāyāsaṃ, mantāya boddhabbaṃ. Kattabbaṃ kusalaṃ caritabbaṃ brahmacariyaṃ. Natthi jātassa amaraṇaṃ.

Seyyathāpi brāhmaṇā, udake daṇḍarāji khippaṃ yeva paṭivigacchati, na ciraṭṭhitikā hoti, evam eva kho brāhmaṇā, udake daṇḍarājūpamaṃ jīvitaṃ manussānaṃ parittaṃ lahukaṃ bahudukkhaṃ bahūpāyāsaṃ mantāya boddhabbaṃ kattabbaṃ kusalaṃ caritabbaṃ brahmacariyaṃ. : Natthi jātassa amaraṇaṃ.

[15]*Seyyathāpi brāhmaṇā, nadī pabbateyyā dūraṅgamā sīghasotā hārahārīnī natthi so khaṇo vā layo vā muhutto vā yam sātharati, atha kho sā gacchateva vattateva sandateva, evam eva kho brāhmaṇā, nadīpabbateyyupamaṃ jīvitaṃ manussānaṃ parittaṃ lahukaṃ bahudukkhaṃ bahūpāyāsaṃ, mantāya boddhabbaṃ. Kattabbaṃ kusalaṃ caritabbaṃ brahmacariyaṃ. Natthi jātassa amaraṇaṃ.*

Seyyathāpi brāhmaṇā, balavā puriso jivhagge kheḷapiṇḍaṃ saññuhitvā appakasireneva vameyya, evam eva kho brāhmaṇā kheḷapiṇḍūpamaṃ jīvitaṃ manussānaṃ parittaṃ lahukaṃ bahudukkhaṃ bahūpāyāsaṃ, mantāya boddhabbaṃ. Kattabbaṃ kusalaṃ caritabbaṃ brahmacariyaṃ. Natthi jātassa amaraṇaṃ

Seyyathāpi brāhmaṇā, divasasaṃtatte ayokaṭāhe maṃsapesī pakkhittā khippaṃyeva paṭivigacchati, na ciraṭṭhitikā hoti, evam eva kho brāhmaṇā, maṃsapesūpamaṃ jīvitaṃ manussānaṃ parittaṃ lahukaṃ bahudukkhaṃ bahūpāyāsaṃ, mantāya boddhabbaṃ. Kattabbaṃ kusalaṃ caritabbaṃ brahmacariyaṃ. Natthi jātassa amaraṇaṃ.

Seyyathāpi brāhmaṇā, gāvī vajjhā āghātanaṃ nīyamānā yaññadeva pādaṃ uddharati santikeva hoti vadhassa santikeva maraṇassa, evam eva kho brāhmaṇa, gāvī vajjhūpamaṃ jīvitaṃ manussānaṃ parittaṃ lahukaṃ bahudukkhaṃ bahūpāyāsaṃ mantāya boddhabbaṃ. Kattabbaṃ kusalaṃ, caritabbaṃ brahmacariyaṃ, natthi jātassa amaraṇanti.

上の比較から、説一切有部に属するとされている漢訳『中阿含經』所収「阿蘭那經」でも[23]、Udv. I 13-16 はこの物語と結びついていた点、及び「阿離念彌經」やパーリ仏典の«*Araka-sutta*»についても、Udv. I 13-16 の一部、若しくはそれに類似する詩句が含まれているだけでなく、「阿蘭那經」・「阿離念彌經」・«*Araka-sutta*»の三者間で共通する詩句も見られるといった点が窺える。この点に注目するならば、この三者は同一の系譜にあると言え、経典の発展や増広という過程を考えると、トカラ語 B3a5-b8 の因縁譚は、実際にどの段階を反映しているかを確定できないにせよ[24]、この物語を Udv. I 13-16 に関連づけているという点では、説一切有部内部の伝承を良

[23] 漢訳『中阿含經』の部派帰属については、榎本 (1980) を参照。

[24] 『法苑珠林』巻 63 に見られる以下の箇所は「阿離念彌經」と字句の出入りはあるものの、基本的には同じ内容を伝えている。「又雜阿含經云。昔者有王名拘彌。國中有樹名羞波提桓。五百六十里圍。下根周匝八百四十里。

く保存しており、東トルキスタン有部所伝の阿含経典から引用された可能性を指摘する事ができよう。

トカラ語 UA の成書過程に関する筆者の推定、即ち、Udv.の各詩節には、全てではないにしても、ある程度は関係づけられる因縁譚が存在し、トカラ仏教において注釈書を編纂する際に、ある詩節については、それがそのまま採用され、ある詩節については別の物語が因縁譚として利用され、現在残されている形の UA として成立したのではないかとする立場に立てば、トカラ語 B3a5-b8 は詩節と因縁譚の関係が維持された例に分類される事を、以上の比較の結果は示していると言える[25]。

このような詩節と因縁譚の関係が維持されたと推定される例として、筆者は Udv. XV 1 とそれに対して与えられた教理的解釈の例を挙げておいたが[26]、この他にも既に比定されたものの内、Udv. XXI 1-7 とその因縁譚[27]を指摘する事ができる。トカラ語 A 断片 No. 217-218 が Udv. XXI 1-7 の因縁譚として、悟りを得た仏陀がベナレスに赴く途次、*Upaga* に出会う話を紹介しているが、このような注釈は『出曜經』巻 20 (T.04, no. 212, 717b17-) でも同様である[28]。なお、この話は仏伝を含めて色々な仏典で語られており、西域北道将来の梵語断片中に含まれる CPS にも、この挿話は確認され、順序は異なるものの、Udv. XXI 1-7 が仏陀によって語られている[29]。また、漢訳『根本説一切有部毘奈耶破僧事』(T.24, no. 1450, 127a14-25) や『中阿含經』「羅摩經」(T.01, no. 26, 777b10-27)[30] といった有部文献にも知られており、Udv. XXI 1-7 の内のいくつかが関係づけられている。

5. トカラ語 B の UA に取り込まれた阿含経典について

これまでは、ドイツ所蔵の梵語断片 SHT1324 + 1331 + 1720 を手かがりに、トカラ語 B の断片を含めて、それに対応するテクストを比較する事によって、トカラ語 B の UA が彼らに知られていた説一切有部の仏典・伝承を引用した可能性について指摘した。これまでの議論で述べたように、UA にはトカラ仏教に伝えられた説一切有部の仏典・伝承が取り込まれているとす

高四千里。枝四布匝二千里。樹有五果。道有五面。一面者國王與宮内諸伎女共食。二面者大臣百官皆共食之。三面者人民共食之。四面者諸釋道士共食之。五面者飛鳥禽獸共食之。果如升瓶。其味甜如蜜樹。無守者果分不相侵。時人壽八萬四千歳。有九種病。一寒二熱三飢四渇五大便六小便七愛欲八食多九年老。女人年五百歳。爾乃行嫁。」(T.53, no. 2122, 768a6-16)。この引用箇所に当たる部分は現在の『雑阿含經』には確認されないが、もし実際に『雑阿含經』からの引用であるとすれば、『雑阿含經』には失われた部分が存在していた事になるだけでなく、SHT1324 + 1331 + 1720 と同様、樹木に言及するこの種の経典が含まれており、トカラ語 B のテクストは、この系統の阿含経典に属していた可能性が浮上する。なお、現存の漢訳『雑阿含經』に混乱が見られ、失われた部分が存在している点については、向井 (1985) を参照。

[25] UA と同様に Udv.の注釈である有部所属とされる漢訳『出曜經』のこれらの詩節に対する注釈 (T.04, no. 212, 614c11-) では、この物語とは異なった注釈が与えられている。なお、『出曜經』の部派帰属や成立過程については、平岡 (2007a) を参照。

[26] 荻原 (2011) を参照。

[27] Sieg and Siegling (1933) を参照。

[28] Sieg and Siegling (1933: 167) に拠ると、*Prajñāvarman* によるチベット語の注釈でも同様の挿話が付されている。

[29] Bernhard (1965: 278-280) を参照。

[30] ドイツ所蔵西域北道将来の梵語断片 SHT1332a + 1493 は「羅摩經」に対応する断片に比定されているが、残念ながら、この箇所に対応する部分は残っていない。

るならば、漢訳仏典やパーリ仏典を参考にして、西域北道に流布していた阿含経典を、UA に用いられた素材から回収する事ができるように思われる。以下、このような例として Udv. I 28-29 に相当する部分を検討するが、議論に必要な Udv. I 30 も含めて、Udv. I 28-30 を先に挙げておく[31]。

Udv. I 28: *jīryanti vai rājarathāḥ sucitrā　hy atho śarīram api jarām upaiti* |
satāṃ tu dharmo na jarām upaiti　santo hi taṃ satsu nivedayanti ||
Udv. I 29: *dhik tvāṃ astu jare grāmye　virūpakaraṇī hy asi* |
tathā manoramaṃ bimbaṃ　jarayā hy abhimarditam ||
Udv. I 30: *yo 'pi varṣaśataṃ jīvet　so 'pi mṛtyuparāyaṇaḥ* |
anu hy enaṃ jarā hanti　vyādhir vā yadi vāntakaḥ ||

[B5a1-b8][32]

a

1　*$n_a$nok pudñä[k]t(e mäskäträ śrā)*

2　*vastī spe sāṅkämpa ‡ kokaletstse īyoy sū prasenacī walo ot † ṣem kautāte koklentse waiptār pwenta käskānte ‡ wa[lo] (rano)*

3　*ce_u preke śaultsa tāka sklo[ka]tstse 66 jetavaṃne pudñäkteś masa yarke ynāñmñesa ‡ kokalentse kautalñe preksa po[yśiṃ] (ot)*

4　*walo ‡ mai ñi tākaṃ laitalñe wrocc = asānmeṃ laṃntuññe ‡ epe wat no śaulantse ñyātse ñi ste nesalle ‡ 67 wñāne[ś] (po-)*

5　*yśi karuntsa mā tañ ñyātstse śolantse ‡ mā r = asānmeṃ laitalñe ceṃ sklok ptārka pälskomeṃ ‡ kos tne ñakta pelaikni (po)*

6　*śaiṣṣents = ānaiwacci ‡ tary = akṣāne pudñäkte teki ktsaitsñe sru[kalñe] 68 toṃ mā tākoṃ śaiṣṣene mā ṅke tsaṅko(y) [pu]dñäkte ‡ toṃ ñyatstse-*

7　*nta wikässiś poyśinta tne tseṅkeṃtar † tumeṃ weña śkamai[yya] l(ā)nte palsko mrauskatsiś † kokaleṣ[ṣ]e (meñ)[ā]ksa ślok ce weña [kä-]*

8　*tkr = ārtho 69 kwreṃntär lānte kokal[y]i [o]lyapotstse pärsāñci ‡ tai[k](n)esāk ra kektseñi kätsai(tsäññe yänmāskeṃ ‡ krentaṃts rano) pelaikne*

b

1　*mā ktsaitsäññe yänmāṣṣäṃ ‡ kreñc no c(ai po) kr(e)ntäṃne śarsäskeṃne eñw(et)sts(e) 70*

---

[31] Bernhard (1965: 105-106)。なお、B5b7 の記載から、後半の部分は Udv. I 29-31 に対する因縁譚である事が窺える。

[32] *TochSprR(B) I*: 9-11 [German translation], 14-15 [transcription]。この断片は Thomas (1964: 53-54) でも取り上げられているが、基本的には同一の再建が為されている。また、Thomas (1983: 29-30 [transliteration], 148-150 [commentary])も参照。なお、この断片も現在は失われており、原文書を調査した上での転写を与える事はできない。

mäkt[e] mesk[i] śe[śś](anmoṣ śänmanmasa koklentse[a] ‡) *[ma]nt a-*

2 *stāṣṣi meski tne ṣñor passontsa śeśśanmoṣ* † *anaiśai kwri pa(pā)ṣ[s]oṣ walke k[l]yentar k(o)kalyi* ‡ *k(ar)ts(a rano) k[e]ktse(ñe) ramer sla-*

3 *ṅktar ṣañäññe 71 allok nano preśyaine śrāvastine mä(skītä)r ñäktemts ñakte pūdñäkte lac lenamem (tso)ṅkaiko* ‡ *kauc ka kaum ṣai*

4 *pärkawo lyama poyśi asāmne* ‡ *śarye wassi rutkāte kaunäś sark kauc yāmṣate 72 lyam = ānande kenisa (ā-)*

5 *lyinesa antapi* ‡ *pudñäktentse kektseño klawātene lyawāne* ‡ *weña poyśiṃś ānande lkāntärc ñakta (indri-)*

6 *ntamts* † *allek tesa nesalyñe*[b] *[e]śne warñai piśantso 73 kautaläñe yetsentse misāmts lkāntä[r]c īlārñe* ‡ *taisa tem ste ā[na](nda snai)*

7 *ersnā sste ktsaitsäññe* ‡ *tumem weña pūdñäkte saṅkaṣṣai tā$_{u}$ wertsyaine* ‡ *tarya śpālmem ślokanma ñwecceṃts traike wikässi(ś 74)*

8 *hiśt t(w)e tākoyt (kts)[aitsä]ññe kärpye yakne mā klyomo* ‡ *[yo]l[ai] erepate twe yamaṣṣeñca wnolmen[ts]o* ‡ *taiknesa cwī pä[l](sk)[o]*[c] – – –

[注釈]

a: *TochSprR(B) I*: 10 Anm. 6 及び Thomas (1964: 53) では、*koklentse śänmanmasa* と再建しているが、Thomas (1983: 14) では韻律の音節配置に従って、*śänmanmasa koklentse* という再建を提示している。ここでは後者に従った。

b: このトカラ語の表現は、パーリ語のパラレルに見られる *aññathatta-* 'change, alteration' (Cone 2001: 47a) に対応する。

c: 残存部分の最後に見られる *pä[l](sk)[o]* という再建については、Thomas (1983: 150) を参照。なお、*TochSprR(B) I*: 11 [German translation] には、訳文に'den Geist'と見られるだけで、トカラ語の再建形は提示されていない。

[和訳][33]

a

1 また或る時、仏陀は僧伽とともに、

2 *Śrāvastī* の近くに (おりました)。その時、車に乗った *Prasenajit* 王が進んでいました。車の車軸が壊れ、車輪の輻がバラバラに散りました。(一方)、王は、

3 この時、命が気がかりになりました。[66] *Jetavana* にいる仏陀の下に行きました。その時、尊敬と敬意を以て、王は仏陀に車が壊れた事を尋ねました。

4 まさか、偉大なる王座から落ちる事が私に起こるのでしょうか。若しくは、私に命の危機が

[33] 和訳文中、Udv. I 28, 29 に対応する部分を下線で示す。

生じるのでしょうか。[67]　仏陀は、

5　慈悲の念を以て彼に言いました。あたなには命の危険もありません。また、王座から落ちる事も (ありません)。心から、このような疑いを捨て去りなさい。神よ。全ての人々には、

6　望ましくない法が何と多い事か。仏陀は、彼に病・老・死の三つを語りました。[68]　世界にこれらのものがなかったなら、仏陀は現れなかったでしょう。これらの危険を

7　追い払うため、諸仏がここに現れているのです。そこで、十の力を持つ者は、王の心に厭世観を抱かせるために言いました。彼は、車の比喩を以て、この深い意味を有する

8　詩節を語りました。[69]　[28]王の車は、どんなに華麗であっても古びてしまう。正に、それと同様に身体は老いに (達する。しかし、善人達の) 法は、

b

1　老いに達しない。また、これらの善人達は、新たに (全ての) 善人達に、それを知らしめる。[70]　(車の) 継手が (紐で) 結びつけられているように、

2　骨の継手は腱と筋肉で結びつけられている。もしも注意深く保たれるなら、車は長い間存在する。(しかし)、良い身体でも、すぐに、

3　その本来の姿を現す。[71]　また或る時、神々の神、仏陀は *Śrāvastī* におられた。朝、彼は住房を出ました。太陽は既に高く

4　昇っていました。仏陀は座に座りました。彼は上衣を脱いで、背中を太陽に向けて高く晒しました。[72]　*Ānanda* は跪き、

5　両の手のひらで仏陀の体を擦りました。*Ānanda* は仏陀に言いました。神よ。

6　あなたの目などの五つの感覚器官に変化が見られます。[73]　あなたの皮膚が裂け、肉が垂れ下がっているのが見えます。正にその通りです。*Ānanda* よ。

7　老いは醜いものです。そこで仏陀は、僧伽の集団の中で、若い僧侶達の困惑を追い払うため、素晴らしい三つの詩節を語りました。([74])

8　[29]ああ、老いよ。あなたは卑しく、美しくはない。あなたは、人々の姿を醜くするものです。そのように、その心 ･･･

筆者が調査した範囲では、上に訳したトカラ語テクストのパラレルとしては、以下のものが指摘されるが、これらは、全体に対応するパラレルと、Udv. I 28 を扱う B5a1-b3 及び Udv. I 29-31 を扱う B5b3-8 に対応するパラレルの三つに大きく分ける事ができる。

0. B5a1-b8: Udv. I 28-29

[漢訳仏典]

『増壹阿含經』26.6 [= T.02, no. 125, 637a18-638a1]: Udv. I 29-30

A. B5a1-b3: Udv. I 28

[パーリ仏典]

SN I 3.1.3: Udv. I 28

[漢訳仏典]

『雑阿含經』「1240 經」: Udv. I 28-30[34]

『別譯雑阿含經』「67 經」: Udv. I 28-30

『出曜經』巻 2 [= T.04, no. 212, 620b19-c12]: Udv. I 28

『佛説無常經』巻 1 [T.17, no. 801, 745c15-746a4]: Udv. I 28-30

B. B5b3-8: Udv. I 29

[パーリ仏典]

SN V 4.5.1.: Udv. I 29-30[35]

[漢訳仏典]

『出曜經』巻 2 [= T.4, no. 212, 620c13-20]: Udv.I 29

0. B5a1-b8 に挙げた『増壹阿含經』巻 18 は重要な部分であり、最後に検討する事として、最初に、その他のテクストを引用する。以下の引用中、A. B5a1-b3 に関連する箇所を下線で、B. B5b3-8 に関連する箇所を波線で示す[36]。

[A. B5a1-b3: Udv. I 28]

SN I 3.1 3. Rājā (SN I: 70-71)

Sāvatthiyam Ekamantaṃ nisinno kho rājā pasenadi kosalo bhagavantam etad avoca atthi nu kho bhante jātassa aññatra jarāmaraṇā ti. Natthi kho mahārāja jātassa aññatra jarāmaraṇā. Yepi te mahārāja khattiyamahāsālā aḍḍhā mahaddhanā mahābhogā pahūtajātarūparajatā pahūtavittupakaraṇā pahūtadhanadhaññā. Tesampi jātānaṃ natthi aññatra jarāmaraṇā. Yepi te mahārāja brāhmaṇamahāsālā aḍḍhā mahaddhanā mahā bhogā pahūtajātarūparajatā pahūtavittupakaraṇā pahūtadhanadhaññā. Tesampi jātānaṃ natthi aññatra jarāmaraṇā. Yepi te mahārāja gahapatimahāsālā aḍḍhā mahaddhanā mahābhogā pahūtajātarūparajatā pahūtavittūpakaraṇā pahūtadhanadhaññā tesampi jātānaṃ natthi aññatra jarāmaraṇā. Yepi te mahārāja bhikkhū arahanto khīṇāsavā vusitavanto katakaraṇīyā ohitabhārā anuppattasadatthā parikkhīṇabhavasaññojanā sammadaññāvimuttā. Tesampāyaṃ kāyo bhedanadhammo nikkhepanadhammoti.

[28] *Jīranti ve rājarathā sucittā atho sarīrampi jaram upeti*

Satañca dhammo na jaram upeti santo have sabbhi pavedayanti.

『雑阿含經』巻 46「1240 經」

---

[34] 『雑阿含經』「1240 經」に対応する Udv.の詩節は、榎本 (1994: 52) にも指摘されている。

[35] このパラレルは、*TochSprR(B) I*: 10 Anm. 8 [German translation] で指摘されている。

[36] 以下のパラレルには Udv. I 30 も含まれており、この部分は二重線で表示する。

「如是我聞。一時。佛住舍衛國祇樹給孤獨園。時。波斯匿王獨靜思惟。作是念。此有三法。一切世間所不愛念。何等為三。謂老病死。如是三法。一切世間所不愛念。若無此三法世間所不愛者。諸佛世尊不出於世。世間亦不知有諸佛如來所覺知法為人廣說。以有此三法世間所不愛念。謂老病死故。諸佛如來出興於世。世間知有諸佛如來所覺知法廣宣說者。波斯匿王作是念已。來詣佛所。稽首佛足。退坐一面。以其所念。廣白世尊。佛告波斯匿王。如是。大王。如是。大王。此有三法。世間所不愛念。謂老病死。乃至世間知有如來所覺知法為人廣說。爾時。世尊復說偈言。

[28]王所乘寶車　　終歸有朽壞
此身亦復然　　遷移會歸老
唯如來正法　　無有衰老相
稟斯正法者　　永到安隱處
[29]但凡鄙衰老　　醜弊惡形類
衰老來踐蹈　　迷魅愚夫心
[30]若人壽百歲　　常慮死隨至
老病競追逐　　伺便輒加害

佛說此經已。波斯匿王聞佛所說。歡喜隨喜。作禮而去。」　(T.02, no. 99, 339c19-340a13)

『別譯雜阿含經』卷4「67經」

「如是我聞。一時。佛在舍衛國祇樹給孤獨園。爾時。波斯匿王於閑靜處。作是思惟。世有三法。一者可憎。二不可愛。三不可追念。何謂可憎。所謂老也。何謂不可愛。所謂病也。何謂不可追念。所謂死也。波斯匿王思惟是已。即從坐起。往詣佛所。頂禮佛已。在一面坐。白佛言。世尊。我於靜處作是思惟。世有三法。一者可憎。二者不可愛。三者不可追念。何謂可憎。所謂老也。何謂不可愛。所謂病也。何謂不可追念。所謂死也。佛告王曰。如是。如是。此三種法實如王言。佛言。大王。世間若無此三。佛不出世。亦不說法。以有此三故。佛出世為眾說法。爾時。世尊即說偈言。

[28]王車嚴飾盛　　莊挍甚奇妙
久故色毀敗　　如身必歸老
實法無衰老　　展轉相付故
[29]咄哉老賊惡　　端正殊妙色
汝能壞敗也　　[30]設壽滿百年
必入于死徑　　病來奪其力
老將付與死　　是故常樂禪
撿心勤精進　　了知生邊際
勝彼魔軍眾　　度有生死岸

佛說是已。諸比丘聞佛所說。歡喜奉行。」　(T.02, no. 100, 397a9-b2)

『出曜經』巻 2

「[28]老則形變　喩如故車　法能除苦　宜以力學

昔佛在舍衛國祇樹給孤獨園。爾時眾多比丘白世尊曰。如來今日年已耆老。肌膚舒緩不與常同。佛告比丘。如是如是。如汝所言。我年已老。設當持戒梵行比丘。以如來身安處高床周行四海。雖與恭敬以報重恩。然我本修無憍慢心自證成佛。吾不說是。老則形變喩如故車。所謂故車者。王家所造。或以金銀刻鏤作車。或水精琉璃雜廁其間。經年積歲猶有朽敗。況四大身筋纏血澆。眾事合集乃成此形。父母所造。十月懷抱推溫去濕。隨時瞻視乃名為人。唯有明智能除此苦。以法自將訓誨未悟。加以權化應適無方。宜以力學。稱佛世尊誘導之言。以無諭諂獨除妄見。不犯身口意行。以第一義充飽一切。將育眾生。行不漏失無懼畏者。謂佛世尊如來弟子。教訓弟子以禁防非。爾時世尊知彼內心有所趣向。尋究本末。亦與後世眾生示現大明。使正法久存於世。在大眾中便說此偈。

[28]老則形變　喩如故車　法能除苦　宜以力學

諸比丘聞佛所說。歡喜作禮而去。」　(T.04, no. 212, 620b19-c12)

『佛說無常經』巻 1

「如是我聞。一時薄伽梵在室羅伐城逝多林給孤獨園。爾時佛告諸苾芻。有三種法。於諸世間是不可愛。是不光澤。是不可念。是不稱意。何者為三。謂老病死。汝諸苾芻。此老病死於諸世間實不可愛。實不光澤。實不可念。實不稱意。若老病死世間無者。如來應正等覺不出於世。為諸眾生說所證法及調伏事。是故應知此老病死。於諸世間是不可愛。是不光澤。是不可念。是不稱意。由此三事。如來應正等覺出現於世。為諸眾生說所證法及調伏事。

爾時世尊重說頌曰。

[28]外事莊彩咸歸壞　內身衰變亦同然

唯有勝法不滅亡　諸有智人應善察

[29]此老病死皆共嫌　形儀醜惡極可厭

少年容貌暫時住　不久咸悉見枯羸

[30]假使壽命滿百年　終歸不免無常逼

老病死苦常隨逐　恒與眾生作無利

爾時世尊說是經已。諸苾芻眾天龍藥叉揵闥婆阿蘇羅等。皆大歡喜。信受奉行。」

(T.17, no. 801, 745c15-746a4)

[B. B5b3-8: Udv. I 29]

SN V 4.5.1. Jarā (SA V: 216-217)

Evam me sutaṃ Ekam samayam Bhagavā Sāvatthivam viharati Pubbārāme Migāramātupāsāde ‖ ‖ *Tena kho pana samayena Bhagavā sāyaṇhasamayam paṭisallāṇā vuṭṭhito pacchātape nisinno hoti pitthim otāpayamāno* ‖ ‖ *Atha kho āyasmā Ānando yena Bhagavā tenupasaṅkami* ‖ *upasaṅkamitvā*

Bhagavantam abhivādetvā Bhagavanto gattāni pāninā anomajjanto Bhagavantam etad avoca ‖ *Acchariyam bhante abbhutam bhante na ceva dāni bhante Bhagavato tāva parisuddho chavivaṇṇo pariyodāto sithilāni ca gattāni sabbāni baliyajātāni purato pabbhāro ca kāyo dissati ca indriyānam aññathattam cakkhundriyassa sotindriyassa ghānindriyassa jivhindriyassa kāyindriyassā ti* ‖ ‖ *Evam hetam Ānanda hoti jarādhammo yobbañňe vyādhidhammo ārogye maraṇadhammo jīvite na ceva tāva parisuddho hoti chavivaṇṇo pariyodāto sithilāni ca honti gattāni sabbāni baliyajātāni purato pabbhāro ca kāyo* ‖ *dissati ca indriyānam aññathattaṃ cakkhundriyassa sotindriyassa ghānindriyassa* ‖ pe ‖ *kāyindriyassā ti* ‖ ‖ *Idam avoca Bhagavā* ‖ *idam vatvā ca sugato athāparam etad avoca satthā* ‖ ‖

[29]*Dhītam jammī jare atthu* ‖ *dubbannakaranī jare* ‖
tāva manoramam vimbam ‖ *jarāya abhimadditam* ‖ ‖
[30]*Yo pi vassataṃ jive* ‖ *so pi maccuparāyano* ‖
na kinci parivajjeti ‖ *sabbam evābhimaddatī ti* ‖ ‖

『出曜經』巻 2

「[29]咄嗟老至　色變作耄　少時如意　老見蹈藉
昔佛在羅閱城迦蘭陀竹園所。爾時尊者阿難著衣正服。偏露右臂長跪叉手白佛言。世尊。今觀如來形變色微。諸根舒緩形狀轉朽。眼根耳鼻舌身諸根不與常同。佛告阿難。如是如是。如汝所言。所謂老者。能使極妙殊特之容變為異色。諸根具滿能使缺漏。與病結伴與死並流。色力豪貴財富盈溢能使闕減。身體平正內理充滿。能使傴步憑杖而行。髮如紺青亦如蜜王猶如純黑。能使變白髮落不住。眼如牛眴白黑分明。能使目中生膚睆翳。額如油光晃昱照曜。能使面皺狀如皮燋。齒如白珂亦如白雪新穀牛乳。如烏賊魚絶白胞滿。上下齊平觀無厭足。能使凋落虫齲疼痛。取要言之。於揵沓和。阿須倫。迦留羅。甄陀羅。摩休勒。人及非人。能使衰耗無少壯心。痛中之苦莫甚於老。是故説曰。
[29]咄嗟老至　色變作耄　少時如意　老見蹈藉
如來世尊以三十二相而自纏絡。八十種好莊嚴其身。圓光七尺無冥不照。八種音聲遠震十方。猶為老病所見蹈藉。況處凡夫得免此乎。以此因尋究本末。為後眾生示現大明。亦使正法久存於世。於大眾中故説斯偈。」　(T.04, no. 212, 620c13-621a7)

以上の比較により、これらのパラレルは、叙述に差異が認められるものの、基本的にはトカラ語 B5a1-b3[37]及び B5b3-8 のそれぞれに対応している事が窺える。ここでは、これらのパラレルが別々の経典として成立している点に注意されたい。

次に、先に示したトカラ語 B テクストの全体に対応するとした『増壹阿含經』巻 18 と『出

[37] 『雜阿含經』『別譯雜阿含經』の両者に、トカラ語 B5a6-7 に対応する記述が見られる点は注目される。また、『出曜經』には、次に挙げる B. B5b3-8: Udv. I 29 の部分で語られる内容にほぼ一致する「如來今日年已耆老。肌膚舒緩不與常同。佛告比丘。如是如是。如汝所言。」という記載が見られる。この二つの物語の親近性を示すものと解釈できるかも知れない。

曜經』巻 2 を検討する[38]。

『増壹阿含經』巻 18 (26.6)

「聞如是。一時。佛在舍衛國祇樹給孤獨園。爾時。尊者阿難至世尊所。頭面禮足。在一面住。斯須。復以兩手摩如來足已。以口鳴如來足上。而作是説。天尊之體。何故乃爾。身極緩爾。如來之身不如本故。世尊告曰。如是。阿難。如汝所言。今如來身皮肉已緩。今日之體不如本故。所以然者。夫受形體。為病所逼。若應病眾生。為病所困。應死眾生。為死所逼。今日如來。年已衰微。年過八十。是時。阿難聞此語已。悲泣哽噎。不能自勝。並作是語。咄嗟。老至乃至於斯。是時。世尊到時。著衣持鉢。入舍衛城乞食。是時。世尊漸漸乞食。至王波斯匿舍。當於爾時。波斯匿門前。有故壞車數十乘。捨在一面。是時。尊者阿難以見車棄在一面。見已。白世尊曰。此車王波斯匿車。昔日作時極為精妙。如今日觀之。與瓦石同色。世尊告曰。如是。阿難。如汝所言。如今觀所有車。昔日之時極為精妙。金銀所造。今日壞敗。不可復用。如是外物尚壞敗。況復內者。爾時。世尊便説此偈。

[29] 咄此老病死　　壞人極盛色
初時甚悅意　　今為死使逼
[30] 雖當壽百歲　　皆當歸於死
無免此患苦　　盡當歸此道
如內身所有　　為死之所驅
外諸四大者　　悉趣於本無
是故求無死　　唯有涅槃耳
彼無死無生　　都無此諸行

爾時。世尊即就波斯匿王坐。是時。王波斯匿與世尊辦種種飲食。觀世尊食竟。王更取一小座。在如來前坐。白世尊曰。云何。世尊。諸佛形體皆金剛數。亦當有老病死乎。世尊告曰。如是。大王。如大王語。如來亦當有此生老病死。我今亦是人數。父名真淨。母名摩耶。出轉輪聖王種。爾時。世尊便説此偈。

諸佛出於人　　父名曰真淨
母名極清妙　　豪族刹利種
死徑為極困　　都不觀尊卑
諸佛尚不免　　況復餘凡俗

爾時。世尊與波斯匿王而説此偈。

祠祀火為上　　詩書頌為尊
人中王為貴　　眾流海為首
眾星月為上　　光明日為先
八方上下中　　世界之所載

[38] 以下の『増壹阿含經』『出曜經』の引用でも、A. B5a1-b3 に関連する箇所を下線で、B. B5b3-8 に関連する箇所を波線で示す。また、Udv. I 30 に対応する部分は二重線で表示する。

天及世人民　　如來最為尊
其欲求福祿　　當供養三佛

是時。世尊説此偈已。便從座起而去。還祇洹精舍。就座而坐。爾時。世尊告諸比丘。有四法。在世間人所愛敬。云何為四。少壯之年。間人民之所愛敬。無有病痛。人所愛敬。壽命。人所愛敬。恩愛集聚。人所愛敬。是謂。比丘。有此四法。世間人民之所愛敬。復次。比丘復有四法。世間人民所不愛敬。云何為四。比丘當知。少壯之年。若時老病。世人所不喜。若無病者。後便得病。世人所不喜。若有得壽命。後便命終。世人所不喜。愛得集。後復別離。世人所不喜。是謂。比丘。有此四法與世迴轉。諸天世人。乃至轉輪聖王。諸佛世尊。共有此法。是為。比丘。世間有此四法與世迴轉。若不覺此四法時。便流轉生死。周旋五道。云何為四。聖賢戒。賢聖三昧。賢聖智慧。賢聖解脫。是為。比丘。有此四法而不覺知者。則受上四法。我今及汝等。以覺知此賢聖四法。斷生死根。不復受有。如今如來形體衰老。當受此衰耗之報。是故。諸比丘。當求此永寂涅槃。不生不老不病不死。恩愛別離。常念無常之變。如是。比丘。當作是念。爾時。諸比丘聞佛所説，歡喜奉行。」　　(T.02, no. 125, 637a18-638a1)

上に示した『增壹阿含經』のテクストは、B. B5b3-8 に対応するテクストに、A. B5a1-b3 のテクストが間に挟み込まれたような形になっている。トカラ語 B のテクストとそれに対応するパラレルの状況から考えて、このテクストは、二つの経典が合成された可能性が指摘される[39]。なお、『增壹阿含經』のテクストで重要な点は、A. B5a1-b3 に対応するテクストに、その他のパラレルでは見られない *Prasenajit* 王の車に言及する点であり、これは、トカラ語 B のテクストで語られる部分とは記述が若干異なるものの、同一の事件に言及していると考えられる。

以上に示した対応に注目するならば、トカラ語 B5a1-b3 の部分と B5b3-8 の部分は、現在は失われているものの、トカラ仏教に伝えられた説一切有部の阿含経典、恐らくは『雜阿含經』に含まれていた別々の経典であり、それぞれ Udv. I 28 と Udv. I 29-31 に対する因縁譚として、そのまま UA に取り込まれた可能性を指摘する事ができる[40]。

6．結論

本稿の第二節では、第一節で紹介した SHT1324 + 1331 + 1720 が、「阿離念彌經」とトカラ語 B3a5-b3 に良く対応する事を確認した。また、第三節では、この断片のパラレルを比較した結

---

[39] 『增壹阿含經』に於ける既存の経典の合成の可能性については、榎本 (1988: 111) を参照。また、『增壹阿含經』の部派帰属と成立過程については、平岡 (2007b, 2008) を参照。

ここで語られている「如今觀所有車。昔日之時極為精妙。金銀所造。今日壞敗。不可復用。如是外物尚壞敗。況復內者。」は、Udv. I 28 を想起させる。

[40] このように考えると、UA が Udv.に注釈を付す際、ある箇所では対象が一つの詩節であるのに対して、別の箇所では二つ以上の複数の詩節となっている状況を説明する事ができる。即ち、注釈の対象とする詩節の数は、注釈として取り込まれた仏典・伝承の状況を反映していると考えられる。

なお、筆者は、トカラ語 A 断片に於ける引用を利用して、トカラ仏教に伝えられた『雜阿含經』「1283 經」に相当する阿含経典を回収した。この部分は、カトマンドゥ写本と共に西域北道将来の梵語断片にも対応箇所が見られるが、後者と一致する読みが部分的に認められた。恐らく、東トルキスタン有部所伝の阿含経典から引用されたものと考えられる。この引用については、荻原 (2009) を参考。

果、これらの仏典は Udv. I 13-16 と関連がある点を明らかにすると同時に、トカラ語 B3a5-b3 は、東トルキスタン有部所伝の阿含経典から引用された可能性を指摘した。そして、第四節では、トカラ語の UA には、トカラ仏教に伝えられた仏典・伝承が取り込まれているという推定に基づいて、トカラ語 B 断片 B5a1-b8 とそのパラレルとの比較を通じて、この部分が、Udv. I 28 を説く B5a1-b3 と Udv. I 29-31 を説く B5b3-b8 の二つの異なった阿含経典から成立している可能性を指摘した。

では、本稿で検討した梵語断片 SHT1324 + 1331 + 1720 は、トカラ語 B の UA が依拠した梵語原典と言えるであろうか。残念ながら、この断片に続く folio は存在せず[41]、また同一の写本に属する断片の存在も現在のところ報告されていないため、この点について明らかにする事はできないが、現在残存している部分に関して言えば、SHT1324 + 1331 + 1720 は、トカラ仏教が行われた地域である西域北道将来の梵語断片中に見出された UA の最初のパラレルであると言える[42]。そして、トカラ仏教が彼らに知られていた梵語仏典をどのように利用していたかを考える上で、トカラ語の UA のパラレルが、この地域に由来する梵語断片中に見出された事の意義は大きい[43]。また、*SHT* 所収断片中、「阿蘭那經」に比定にされた断片は、この三点以外にも、*SHT (VII)* で出版された SHT1770cA 及び 1770dA の二点存在しており、このような内容を持った仏典が、当時トカラ仏教徒に知られており、UA の編纂過程で利用されたとする推定を裏付ける事になろう[44]。

なお、本稿では、UA のパラレルを利用してトカラ仏教に伝えられていたと推定される阿含経典の分析を行ったが、この他にもトカラ語仏典中に阿含経典に比定、若しくは阿含経典に関係づけられる断片が存在している事が明らかになりつつある。筆者の研究では、荻原 (2010)[45]

---

[41] THT1632.frg.c.verso には *araṇemi* と読める箇所が二例確認される。この断片の recto はトカラ語 A であるが、verso がトカラ語 A か梵語かの判断はできない。

[42] 各国所蔵の西域北道将来梵語断片中には、現在までのところ、トカラ語の UA の原典と見られる断片の存在は報告されていない。そのため、現時点では、この断片を以て UA のインド語原典とは見做さない。

[43] ドイツ所蔵の西域北道将来梵語断片に見られるトカラ語の gloss については、Malzahn (2007b) を参照。ドイツ以外の国々に所蔵されている梵語断片についても、このような研究が望まれる。なお、筆者はサンクト・ペテルブルグ所蔵のトカラ語断片を調査した際、梵語断片 SI B/16-11a4 の Skt. *nimi[tta]nusā* + /// に対して、Toch.B *ṣotry omposta(m) ynūca* – –'going after a sign, mark'と読めるトカラ語 B の gloss を確認した。これは、Skt. *nimitta-anusāra-*, °*-anusāraka-*, °*-anusārin-* 'going afrer a mark, sign'に対する gloss と推定される。また、同じく梵語断片 SI B/20-23a1 には//// *mapai viriṇam api* //// とあり、*viriṇam* の下にはトカラ語 B による *ikallo ramt* '(just) like *ikallo*'という gloss が記されている。この gloss に現れる *ikallo* という語は hapax であるが、注釈対象の Skt. *vīriṇa-* 'Andropogon Muricatus (MW: 1006c)'か、それに類する植物を表すと推定される。ただ、トカラ語 B の *ikallo* が植物を表すとしても、この語が、Skt. *ikkaṭa-*, *itkaṭa-* 'a kind of reed (MW: 163c, 165b)', *utkaṭa-* 'Saccharum Sara (MW: 175c)'といった梵語から推定される Prākrit 形式に由来するものか否かは判断できない。

[44] SHT1770cA 及び 1770dA は共に *Kizil* で発見され、使用された *Brāhmī* 文字も、SHT1324 + 1331 + 1720 に使用される *Schriftypus* VI よりも古い *Schriftypus* IV に分類される。この点から、比較的早い時期に、このような内容の仏典が西域北道の仏教の中心地である *Kucha* で知られていた可能性が指摘される。

なお、トカラ語の UA の断片は大部分が *Shorchuk* 発見のものであるが、*Kucha* の *Kizil* や *Duldur-akhur* 発見の断片も知られている。このような断片の分布から、UA がトカラ仏教では非常に良く知られた文献であった事が窺える。また、Peyrot (2008: 219) にあるように、*Kizil* 発見の断片にはトカラ語 B の *Archaic* の段階を示す形式が含まれており、トカラ仏教の古い段階で UA が編纂された事を示唆している。ただし、これらの *Kizil* 発見の断片に使用された *Brāhmī* 文字は古い段階の特徴を示さず、Malzahn (2007a) の分類では *Standard* に分類されるものであり、古い写本の後代のコピーと考えられる。

[45] 論文投稿後、筆者はベルリン所蔵の原文書の調査を行う機会を得たが、新しく発見した点もあったため、改

で扱ったドイツ所蔵トカラ語B断片B404は、«*Cakkavatti-sīhanāda-sutta*»に比定される[46]。また、トカラ語B断片B590は、漢訳『長阿含経』やその単行経典に含まれる所謂「世記経」や阿毘達磨文献にパラレルが見られる[47]。トカラ仏教で、どのような阿含経典が知れていて、どのようにそれらが受容されていたのかという問題は、今後解明されるべき課題である。そして、トカラ語のUAは、現在までに知られているトカラ語仏典中、同一の作品に属する断片が多く、また保存状態の良い断片も含まれており、トカラ仏教の解明に関する手かがりを与えてくれる。今後も、この文献の構成の解明を通じて、トカラ仏教に於ける仏典作成の実態やトカラ仏教そのものについて研究を続けて行きたい。

文献略号

AN = *Aṅguttara-Nikāya.*

CPS = *Catuṣpariṣatsūtra.*

SN = *Saṃyutta-nikāya.*

UA = *Udānālaṅkāra.*

Udv. = *Udānavarga.*

参考文献

Bernhard, Franz (1965) *Udānavarga*. Band I. Einleitung, Beschreibung der Handschriften, Textausgabe, Bibliographie. (Sanskrittexte aus den Turfanfunden. X). Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht.

Cone, Margaret (2001) *A Dictionary of Pāli. Part I: a-kh*. Oxford: Pali Text Society.

榎本文雄 (1980) *Udānavarga* 諸本と雑阿含経、別訳雑阿含経、中阿含経の部派帰属」『印度學佛教學研究』28-2: 931-933.

榎本文雄 (1982) 「雑阿含経1299経と1329経をめぐって」『印度學佛教學研究』30-2: 957-963.

榎本文雄 (1984) 「説一切有部系アーガマの展開 —『中阿含』と『雑阿含』をめぐって—」『印度學佛教學研究』32-2: 1070-1073.

榎本文雄 (1988) 「初期仏教思想の生成—北伝阿含の成立」『インド仏教 I 』 岩波講座　東洋思想　第8巻: 99-116. 東京: 岩波書店.

榎本文雄, Enomoto Fumio, (1994) *A Comprehensive Study of the Chinese Saṃyuktāgama. Indic Texts Corresponding to the Chinese Saṃyuktāgama as Found in the Sarvāstivāda-Mūlasarvāstivāda Literature*, Part 1: **Saṃgītinipāta*, Kyōto: Kacho Junior College.

Feer, Leon (1884) [2006] *Saṃyutta-nikāya. Vol. I.* London: Pali Text Society.

訂版を仕上げ編集者に提出したが、出版には間に合わず古いものが出版されてしまった。また、筆者には一度も校正の機会が与えられなかったため、出版された論文には色々と問題がある。そのため、改訂版を近刊予定である。

[46] 荻原 (2009) と本稿で扱った断片が韻文部分であるのに対して、B404は、トカラ語文献では良く見られる、韻文と散文が交互に現れる文体で書かれている。そのため、この断片は«*Cakkavatti-sīhanāda-sutta*»の adaptation であると推定されるが、これがトカラ仏教の側で行われたものか否かは判断が難しい。

[47] ここでは、パラレルとして『長阿含経』「三中劫品」(T.01, no.1, vol. 22, 144a19-145a3) と『阿毘達磨大毘婆沙論』(T.27, no.1545, vol. 134, 693a7-b16) のみを挙げておく。なお、この断片については、中央アジア学フォーラム (2011年4月2日、於大阪大学) で、「ドイツ所蔵トカラ語B断片THT590をめぐって」というタイトルの口頭発表を行った。現在、当該断片の新しい転写と解釈に関する論文を準備中である。

Feer, Leon (1898) [1976] *Saṃyutta-nikāya. Vol. V*. London: Pali Text Society.

Hardy, Edmund (1899) [1979] *Aṅguttara-nikāya. Vol. IV*. London: Pali Text Society.

平岡聡 (2007a)「『出曜經』の成立に関する問題」『印度學佛教學研究』 55-2: 842-848.

平岡聡 (2007b) 『増一阿含経』の成立解明に向けて (1) 」『印度學佛教學研究』56-1: 298-305.

平岡聡 (2008) 『増一阿含経』の成立解明に向けて (2) 」『印度學佛教學研究』57-1: 312-319.

百済康義 (1972)「トカラ語仏典 *Udānālaṃkāra* におけるアビダルマ的註解」『仏教学研究』29: 37-62.

Lévi, Sylvain (1933) *Fragments de textes koutchéens (Udānavarga, Udānastotra, Udānālaṃkāra et Karmavibhaṅga) publiés et traduits avec un vocabulaire et une introduction sur le «Tokharien»*. Paris: Société Asiatique.

Malzahn, Melanie (2007a) The Most Archaic Manuscripts of Tocharian B and the Varieties of the Tocharian B Language. In: Melanie Malzahn (ed.), *Instrumenta Tocharica*. Heidelberg: Winter, 255-297.

Malzahn, Melanie (2007b) A Preliminary Survey of the Tocharian Glosses in the Berlin Turfan Collection. In: Melanie Malzahn (ed.), *Instrumenta Tocharica*. Heidelberg: Winter, 301-319.

Malzahn, Melanie (2010) *The Tocharian verbal system*. Leiden: Brill.

MW = Monier-Williams, Monier (1899) *Sanskrit-English Dictionary*. Oxford: Clarendon Press.

向井亮 (1985) 「『瑜伽師地論』の摂事分と『雑阿含経』—『論』所説の<相応アーガマ>の大網から『雑阿含経』の組織復原案まで— 附 『論』摂事分—『経』対応関係一覧表」『北海道大學文學部紀要』33-2: 1-41.

中谷英明 (1988) 『スバシ写本の研究』京都: 人文書院

荻原裕敏 (2009)「トカラ語 A«*Puṇyavanta-Jātaka*»に於ける阿含経典の引用について」『東京大学言語学論集』28: 133-171.

荻原裕敏, Ogihara Hirotoshi, (2010) On a fragment of the *Cakkavatti-sīhanāda-sutta* in Tocharian B. 『西域歴史語言研究集刊』第四輯: 187-199. 北京: 中国人民大学国学院西域歴史語言研究所.

荻原裕敏 (2011) 「トカラ語 B«*Udānālaṅkāra*»に於ける *Avadāna* 利用について」『東京大学言語学論集』31.

Peyrot, Michaël (2008) *Variation and Change in Tocharian B*. Amsterdam: Rodopi.

齋藤治之, Saito Haruyuki, (2006) *Das Partizipium Präteriti im Tocharischen*. Wiesbaden: Harrassowitz.

Sander, Lore (1968) *Paläographisches zu den Sanskrithandschriften der Berliner Turfansammlung*. (VOHD Suppl. 8). Wiesbaden: Franz Steiner.

Sander, Lore (1986) Brāhmī Scripts on the Eastern Silk Roads. *Studien zur Indologie und Iranistik*.11/12: 159-192.

Schmithausen, Lambert (1970) Zu den Rezensionen des Udānavargaḥ. *WZKSO* XIV: 47-124.

SHT = *Sanskrithandschriften aus den Turfanfunden*. Teil 1-4, Wiesbaden; Teil 5-10, Stuttgart: Franz

Steiner, 1965-2008.

Sieg, Emil and Wilhelm Siegling (1933) Bruchstück eines Udānavarga-Kommentars (Udānālaṃkāra?) im Tocharischen. In: Otto Stein and Wilhelm Gampert (eds.) *Festschrift für Moriz Winternitz zum siebzigsten Geburtstag*. Leibzig: Harrassowitz, 167-173.

Sieg, Emil and Wilhelm Siegling (1949) *Tocharische Sprachreste. Sprache B. Heft 1. Die Udānālaṅkāra-Fragmente, [I] Texte, [II] Übersetzung und Glossar*. Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht.

T. = *Taisho Tripiṭaka*.

玉井達士, Tamai Tatsushi, (2011) Transliterations of the Tocharian B *Udānālaṅkāra* Fragments in the Berlin Collection. 『創価大学国際仏教学高等研究所年報』第 14 号: 81-125.

TochSprR(B) I = Sieg, Emil and Wilhelm Siegling (1949).

Thomas, Werner (1964) *Tocharisches Elementarbuch. Band II*. Heidelberg: Winter.

Thomas, Werner (1983) *Tocharische Sprachreste: Sprache B. Teil 1: Die Texte. Band 1: Fragmente Nr. 1-116 der Berliner Sammlung. Neubearb. und mit einem Kommentar nebst Register versehen von Werner Thomas*. Göttingen: Vandenhoeck und Ruprecht.

Winter, Werner (1962) Nominal and pronominal dual in Tocharian. *Language* 38 (1962): 111-134.

Winter, Werner (2005) *Kleine Schriften*. Olav Hackstein (ed.), Bremen: Hempen Verlag.

[Texts]

[トカラ語 B]

B3a5-b8[48]

a

5 *$n_a$nok alyek (preke śrāvast)n(e po)yś[i] (käṣṣi mäskīträ m)ṛgārañ stāṅkne kreṃnt ‡ ṣamyeṃ māka ṣamāni aplāc ākteke te to-*

6 *tka śaul śāmnaṃts ‡ wnolmi (tan)e snai spelke mā mrau[ska]lñ = ersenträ 90 klyauṣa pūdñäkte plā[c] (cainats) ñäkcyane (klautsnesa śem i)[p](r)e(rm)eṃ [c]e_u ykene ‡ preksa ṣamāneṃ pudñäkte mäktā$_u$ plācsa ṣmīcer yes a-*

7 *kṣāre poyśiṃtse ‡ palāteme makāykne käṣṣī n[auṣa]ññai ṣp plāc akṣām = aurtsesa ‡ (kau)ra[v]ye ñem [wa](lo ṣai tane jambudvipne 91) supratiṣṭhit ñem nigrot (ṣai) stanāṃts wlo cwi yapoyne piś āntsen[tsa]*

8 *w[r]otse ‡ śa(woṃ)n = okonta swāre ṣ ṣai (oko mit ra)[m](t) śū[ke]ne w[r]occ = āntseṃ(ts) karākn(e) ‡ ṣem = ā(ntseme)ṃ [st](am)a(ntse walo wcemeṃ wertsya tri)cemeṃ y[p]oyi ‡ ś[ta]rc = ān[ts]emeṃ ost[m]eṃ l[t](w)eṣ (p)iṅc = āntsemeṃ l(w)ā(sa)*

b

1 *92 mā śwoṃ (ā)lyauce okonta lwā[sa] (śwoyeṃ ce)w preke m[ā snai] p(e)le yāmṣyeṃ ‡ cwi lānte (no) omp brā(hmaṇe aranemi ñemtsa ṣai) aiś(au)my = (a)ñmāla[ṣ]ke ‡ śāmna(ṃ)ts śaul ṣai ṣkas [t]mane p[i]$k_u$la a(ra)-*

2 *nemiñ tākā keś tättālñe ‡ mäntarṣkeṃ śaul śāmnats ñke mā = rsenträ mrauskalñe 93 sū präskau (śau)ltsa lac o[s]tm(eṃ kaṣār ausu āśc märtkau mamrau)skaṣ palskosa ‡ snai ke(ś) y(ä)ltsenma tmanenma aranemiṃmpa la-*

3 *teṃ ostmeṃ wnolmi ‡ nigrot (s)t(ā)[m] ñ[o]r ṣek su mäskīträ omp akalṣlyeṃts pelaikn = āksaṣṣi (‡) ompakwättñe śau[l](natse yāmṣate su ai)ś[ai] 94 śaul attsaik totka śāmnaṃts ñke wrīyeṣṣe pältakwä atyaṃts a-*

4 *(k)e[nta]sa ‡ (kantw = arṣ)[ā]klaṃts ramt klautso ramt oṅkolmantse wāska(mo) – – .k. – [m]ā – (‡) – – – – – – (a)kṣāme aranemi käṣṣī sw akalṣlyeṃts ‡ klautsne = naiśai pepīltso śau-*

5 *(l)mpa mā spänteträ 95 mäkte ña(re) [tn]e pänno[wo] kos sarkimpa w(ā)p(a)trä (tot)k(a tot mäsketrä ‡ ma)nt śāmn(aṃ)ts śaul tne kos śaiṃ ksa kaunaṃts meña(ṃ)ts kätkorne kärsnātr attsaik postäṃ ‡ mäkte kau-*

6 *tsy = akemane wnolme (tne) kos saikaṃ ṣikont = e(r)k(e)nmaś ‡ tot srūkalñe(ś mäs)[k](e)t]rä mant śāmnaṃts [śau]l (nakṣträ) 96 wai(me)netse śaul totk = āttsaik su ṣp laklempa rittowo mā no wnolmy aikenträ ‡ śa-*

---

[48] トカラ語Bテクスト全文の和訳については、本稿中に与えたものを参照。

7 *kātaṣṣa sā$_u$ sälyye mkt[e] (wa)rne na[kṣtä]r ṣe prentse mant śāmnaṃts śaul nakṣtä[r] (‡ mā) stemye ksa (ne)säṃ śaulantse (la)[k]l(e) snaits(ñ)e tetkāk ṣp [känma]ṣṣäṃ ‡ karsnaṃ pärmaṅk ṣañ śāmnaṃts mäntaṃ pw akālkänta 97*

8 *(toṃ a)[ra]nemi ś(l)okanma ākṣ = ākalṣ(ly)eṃ[ts] ce(w pr)e(ke tn)e(k māka mrau)s[k]ā(nte) ‡ ṣkas tmāne pik$_u$[la] śau[l] (ś)āmnaṃts attsaik tot[ka] ceṃts ynāñ[m] ṣai lateṃ ost(m)eṃ snai(tsñ)e ‡ ña[k]e [ś]au[l] attsai[k] to[t](k)[ā] (yärm s)e*

[漢訳仏典]

『中阿含經』卷40

「我聞如是。一時。佛遊舍衛國。在勝林給孤獨園。爾時。諸比丘於中食後集坐講堂。論如是事。諸賢。甚奇。甚奇。人命極少。要至後世。應作善事。應行梵行。生無不死。然今世人於法行。於義行。於善行。於妙行。無為無求。彼時。世尊在晝行處。以淨天耳出過於人。聞諸比丘於中食後集坐講堂。論如是事。諸賢。甚奇。甚奇。人命極少。要至後世。應作善事。應行梵行。生無不死。然今世人於法行。於義行。於善行。於妙行。無為無求。世尊聞已。則於晡時從燕坐起。往詣講堂。在比丘眾前敷座而坐。問諸比丘。汝論何事。以何等故集坐講堂。時。諸比丘白曰。世尊。我等眾比丘於中食後集坐講堂。論如是事。諸賢。甚奇。甚奇。人命極少。要至後世。應作善事。應行梵行。生無不死。然今世人於法行。於義行。於善行。於妙行。無為無求。世尊。我等共論此事。以此事故集坐講堂。世尊歎曰。善哉。善哉。比丘。謂汝作是說。諸賢。甚奇。甚奇。人命極少。要至後世。應作善事。應行梵行。生無不死。然今世人於法行。於義行。於善行。於妙行。無為無求。所以者何。我亦如是說。甚奇。甚奇。人命極少。要至後世。應作善事。應行梵行。生無不死。然今世人於法行。於義行。於善行。於妙行。無為無求。所以者何。乃過去世時。有眾生壽八萬歲。比丘。人壽八萬歲時。此閻浮洲極大豐樂。饒財珍寶。村邑相近。如鷄一飛。比丘。人壽八萬歲時。女年五百乃當出嫁。比丘。人壽八萬歲時。唯有如是病。謂寒熱大小便欲不食老。更無餘患。比丘。人壽八萬歲時。有王名拘牢婆。為轉輪王。聰明智慧。有四種軍。整御天下。由己自在。如法法王成就七寶。彼七寶者。輪寶象寶馬寶珠寶女寶居士寶主兵臣寶。是謂為七。千子具足。顏貌端正。勇猛無畏。能伏他眾。必當統領此一切地。乃至大海。不以刀杖。以法教令。令得安隱。比丘。拘牢婆王有梵志。名阿蘭那大長者。為父母所舉。受生清淨。乃至七世父母不絶種族。生生無惡博聞總持。誦過四典經。深達因緣正文戲五句說。比丘。梵志阿蘭那有無量百千摩納磨。梵志阿蘭那為無量百千摩納磨住一無事處。教學經書。爾時。梵志阿蘭那獨住靜處。燕坐思惟。心作是念。甚奇。甚奇。人命極少。要至後世。應作善事。應行梵行。生無不死。然今世人於法行。於義行。於善行。於妙行。無為無求。我寧可剃除鬚髮。著袈裟衣，至信捨家無家學道。於是。梵志阿蘭那往至若干國眾多摩納磨所。而語彼曰。諸摩納磨。我獨住靜處。燕坐思惟。心作是念。甚奇。甚奇。人命極少。要至後世。應作善事。應行梵行。生無不死。然今世人於法行。於義行。於善行。於妙行。無為無求。我今寧可剃除鬚髮。著袈裟衣。至信捨家無家學道。諸摩納磨。我今欲剃除鬚髮。著袈裟衣。至信捨家無家學道。汝等當作

何等。彼若干國眾多摩納磨白曰。尊師。我等所知。皆蒙師恩。若尊師剃除鬚髮。著袈裟衣。至信捨家無家學道者。我等亦當剃除鬚髮。著袈裟衣。至信捨家無家從彼尊師出家學道。於是。梵志阿蘭那則於後時剃除鬚髮。著袈裟衣。至信捨家無家學道。彼若干國眾多摩納磨亦剃除鬚髮。著袈裟衣。至信捨家無家。從彼尊師梵志阿蘭那出家學道。是為尊師阿蘭那。是為尊師阿蘭那弟子名號生也。爾時。尊師阿蘭那為弟子説法。諸摩納磨。甚奇。甚奇。人命極少。要至後世。應作善事。應行梵行。生無不死。然今世人於法行。於義行。於善行。於妙行。無為無求。爾時。尊師阿蘭那為弟子説法。諸摩納磨。甚奇。甚奇。人命極少。要至後世。應作善事。應行梵行。生無不死。然今世人於法行。於義行。於善行。於妙行。無為無求。如是尊師阿蘭那為弟子説法。復次。尊師阿蘭那為弟子説法。摩納磨。猶如朝露滴在草上。日出則消。暫有不久。如是。摩納磨。人命如朝露。甚為難得。至少少味。大苦災患。災患甚多。如是尊師阿蘭那為弟子説法。復次。尊師阿蘭那為弟子説法。摩納磨。猶大雨時。滴水成泡。或生或滅。如是。摩納磨。人命如泡。甚為難得。至少少味。大苦災患。災患甚多。如是尊師阿蘭那為弟子説法。復次。尊師阿蘭那為弟子説法。摩納磨。猶如以杖投著水中。還出至速。如是。摩納磨。人命如杖。投水出速。甚為難得。至少少味。大苦災患。災患甚多。如是尊師阿蘭那為弟子説法。復次。尊師阿蘭那為弟子説法。摩納磨。猶新瓦杅。投水即出。著風熱中。乾燥至速。如是。摩納磨。人命如新瓦杅。水漬速燥。甚為難得。至少少味。大苦災患。災患甚多。如是尊師阿蘭那為弟子説法。復次。尊師阿蘭那為弟子説法。摩納磨。猶如小段肉著大釜水中。下熾然火。速得消盡。如是。摩納磨。人命如肉消。甚為難得。至少少味。大苦災患。災患甚多。如是尊師阿蘭那為弟子説法。復次。尊師阿蘭那為弟子説法。摩納磨。猶縛賊送至標下殺。隨其舉足。步步趣死。步步趣命盡。如是。摩納磨。人命如賊。縛送標下殺。甚為難得。至少少味。大苦災患。災患甚多。如是尊師阿蘭那為弟子説法。復次。尊師阿蘭那為弟子説法。摩納磨。猶如屠兒牽牛殺子。隨其舉足。步步趣死。步步趣命盡。如是。摩納磨。人命如牽牛殺。甚為難得。至少少味。大苦災患。災患甚多。如是尊師阿蘭那為弟子説法。復次。尊師阿蘭那為弟子説法。摩納摩。猶如機織。隨其行緯。近成近訖。如是。摩納磨。人命如機織訖。甚為難得。至少少味。大若災患。災患甚多。如是尊師阿蘭那為弟子説法。復次。尊師阿蘭那為弟子説法。摩納磨。猶如山水。瀑漲流疾。多有所漂。水流速駛。無須臾停。如是。摩納磨。人壽行速。去無一時住。如是。摩納磨。人命如駛水流。甚為難得。至少少味。大苦災患。災患甚多。如是尊師阿蘭那為弟子説法。復次。尊師阿蘭那為弟子説法。摩納磨。猶如夜闇以杖投地。或下頭墮地。或上頭墮地。或復臥墮。或墮淨處。或墮不淨處。如是。摩納磨。眾生為無明所覆。為愛所繫。或生泥犁。或生畜生。或生餓鬼。或生天上。或生人間。如是。摩納磨。人命如闇杖投地。甚為難得。至少少味。大苦災患。災患甚多。如是尊師阿蘭那為弟子説法。復次。尊師阿蘭那為弟子説法。摩納磨。我於世斷除貪伺。心無有諍。見他財物諸生活具。不起貪伺。欲令我得。我於貪伺淨除其心。如是瞋恚睡眠調悔。我於世斷疑度惑。於諸善法無有猶豫。我於疑惑淨除其心。摩納磨。汝等於世亦當斷除貪伺。心無有諍。見他財物諸生活具。不起貪伺。欲令我得。汝於貪伺淨除其心。如是瞋恚睡眠調悔。汝於世斷疑度惑。於諸善法無有猶豫。如是尊師阿蘭那為弟子説法。復次。尊師阿蘭那為弟子説法。摩納磨。我心與慈俱。遍滿一方成就遊。如是三四方四維上下。普周一切。心與慈俱。無結無怨。無恚無

諍。極廣甚大。無量善修。遍滿一切世間成就遊。如是悲喜心與捨俱。無結無怨。無恚無諍。極廣甚大。無量善修。遍滿一切世間成就遊。摩納磨。汝等亦當心與慈俱。遍滿一方成就遊。如是二三四方四維上下。普周一切。心與慈俱。無結無怨。無恚無諍。極廣甚大。無量善修。遍滿一切世間成就遊。如是悲喜心與捨俱。無結無怨。無恚無諍。極廣甚大。無量善修。遍滿一切世間成就遊。如是尊師阿蘭那為弟子説法。復次。尊師阿蘭那為弟子説梵世法。若尊師阿蘭那為説梵世法時。諸弟子等有不具足奉行法者。彼命終已。或生四王天。或生三十三天。或生焰摩天。或生兜瑟哆天。或生化樂天。或生他化樂天。若尊師阿蘭那為説梵世法時。諸弟子等設有具足奉行法者。修四梵室。捨離於欲。彼命終已。得生梵天。爾時。尊師阿蘭那而作是念。我不應與弟子等同。俱至後世共生一處。我今寧可更修增上慈。修增上慈已。命終得生晃昱天中。尊師阿蘭那則於後時更修增上慈。修增上慈已。命終得生晃昱天中。尊師阿蘭那及諸弟子學道不虛。得大果報。比丘。於意云何。昔時尊師阿蘭那者謂異人耶。莫作斯念。所以者何。比丘。當知即是我也。我於爾時名尊師阿蘭那。我於爾時有無量百千弟子。我於爾時為諸弟子説梵世法。我説梵世法時。諸弟子等有不具足奉行法者。彼命終已。或生四王天。或生三十三天。或生焰摩天。或生兜瑟哆天。或生化樂天。或生他化樂天。我説梵世法時。諸弟子等設有具足奉行法者。修四梵室。捨離於欲。彼命終已。得生梵天。我於爾時而作是念。我不應與弟子等同。俱至後世共生一處。我今寧可更修增上慈。修增上慈已。命終得生晃昱天中。我於後時更修增上慈。修增上慈已。命終得生晃昱天中。我於爾時及諸弟子學道不虛。得大果報。我於爾時自饒益。亦饒益他。饒益多人。愍傷世間。為天為人求義及饒益。求安隱快樂。我於爾時説法不至究竟。不究竟白淨。不究竟梵行。不究竟梵行訖。我於爾時不離生老病死啼哭憂惑。亦未能得脱一切苦。比丘。我今出世。如來無所著等正覺明行成為善逝世間解無上士道法御天人師。號佛眾祐。我今自饒益。亦饒益他。饒益多人。愍傷世間。為天為人求義及饒益。求安隱快樂。我今説法得至究竟。究竟白淨。究竟梵行。究竟梵行訖。我今已離生老病死啼哭憂惑。我今已得脱一切苦。比丘。若有正説者。人命極少。要至後世。應行善事。應行梵行。生無不死。比丘。今是正説。所以者何。今若有長壽。遠至百歲。或復小過者。若有長壽者。命存三百時。春時百。夏時百。冬時百。是命存千二百月。春四百月。夏四百。冬四百。命存千二百月者。命存二千四百半月。春八百。夏八百。冬八百。命存二千四百半月者。三萬六千晝夜。春萬二千。夏萬二千。冬萬二千。命存三萬六千晝夜者。七萬二千食。及障礙及母乳。於有障礙。苦不食。瞋不食。病不食。有事不食。行來不食。至王間不食。齋日不食。不得者不食。是謂比丘一百歲命存百歲數。時數。歲時數。月數。半月數。月半月數。晝數。夜數。晝夜數。食數。障礙數。食障礙數。比丘。若有尊師所為弟子起大慈哀。憐念愍傷。求義及饒益。求安隱快樂者。我今已作。汝亦當復作。至無事處。山林樹下。空安靜處。燕坐思惟。勿得放逸。懃加精進。莫令後悔。此是我之教勅。是我訓誨。佛説如是。彼諸比丘聞佛所説。歡喜奉行。」　(T.01, no. 26, 682b10-684c14)

『六度集經』巻8「阿離念彌經」

「聞如是。一時佛在舍衛國優梨聚中。時。諸比丘。中飯之後坐於講堂。私共講議。人命致短。身安無幾。當就後世。天人眾物無生不死。愚闇之人。慳貪不施。不奉經道。謂善無福。惡無重

殃。恣心快志。惡無不至。違於佛教。後悔何益。佛以天耳。遙聞諸比丘講議非常無上之談。世尊即起至比丘所。就座而坐。曰。屬者何議。長跪對曰。屬飯之後。共議人命恍惚不久當就後世。對如上說。世尊歎曰。善哉善哉。甚快。當爾棄家學道。志當清潔。唯善可念耳。比丘坐起當念二事。一當說經。二當禪息。欲聞經不。對曰。唯然。願樂聞之。世尊即曰。昔有國王名曰拘獵。其國有樹。樹名須波桓樹。圍五百六十里。下根四被八百四十里。高四千里。其枝四布二千里。樹有五面。一面王及宮人共食之。二面百官食之。三面眾民食之。四面沙門道人食之。五面鳥獸食之。其樹果大如二斗瓶。味甘如蜜。無守護者亦不相侵。時。人皆壽八萬四千歲。都有九種病。寒熱飢渴大小便利愛欲食多年老體羸。有斯九病。女人年五百歲乃行出嫁。時有長者名阿離念彌。財賄無數。念彌自惟。壽命甚促。無生不死。寶非己有。數致災患。不如布施以濟貧乏。世榮雖樂。無久存者。不如棄家。捐穢濁執清潔。被袈裟作沙門。即詣賢眾受沙門戒。凡人見念彌作沙門。數千餘人。聞其聖化皆覺無常。有盛即衰。無存不亡。唯道可貴。皆作沙門。隨其教化。念彌為諸弟子說經曰。人命致短。恍惚無常。當棄此身就於後世。無生不死。焉得久長。是故當絶慳貪之心。布施貧乏。撿情攝欲。無犯諸惡。人之處世命流甚迅。人命譬若朝草上露須臾即落。人命如此。焉得久長。人命譬若天雨墮水泡起即滅。命之流疾有甚於泡。人命譬若雷電恍惚。須臾即滅。命之流疾有甚雷電。人命譬若以杖捶水。杖去水合。命之流疾有甚於此。人命譬若熾火上炒少脊著中。須臾燋盡。命之流去疾於少脊。人命譬若織機經縷。稍就減盡。天命日夜耗損若茲。憂多苦重。焉得久長。人命譬若牽牛市屠。牛一遷步。一近死地。人得一日猶牛一步。命之流去又促於此。人命譬若水從山下。晝夜進疾無須臾止。人命過去有疾於此。晝夜趣死。進疾無住。人處世間。甚勤苦多憂念。人命難得。以斯之故。當奉正道。守行經戒無得毀傷。布施窮乏。人生於世無不死者。念彌教諸弟子如斯。又曰。吾棄貪婬瞋恚愚癡歌舞伎樂睡眠邪僻之心。就清淨心。遠離愛欲。捐諸惡行。內洗心垢。滅諸外念。覩善不喜。逢惡不憂。苦樂無二清淨其行。一心不動得第四禪。吾以慈心教化人物。令知善道昇生天上。悲憐傷愍恐其墮惡。吾見四禪及諸空定。靡不照達。其心歡喜。以其所見教化萬物。令見深法。禪定佛事。若有得者亦助之喜。養護萬物如自護身。行此四事其心正等。眼所受見麤好諸色。其耳所聞歎音罵聲。香熏臭穢美味苦辛。細滑麤惡。可意之願。違心之惱。好不欣豫。惡不怨恚。守斯六行。以致無上正真之道。若曹亦當行斯六行。以獲應真之道。念彌者三界眾聖之尊師也。智慧妙達無窮不明矣。其諸弟子雖未即得應真道者。要其壽終皆生天上。心寂志寞尚禪定者。皆生梵天。次生化應聲天。次生不憍樂天。次生兜術天。次生炎天。次生忉利天。次生第一天上。次生世間王侯之家。行高得其高。行下得其下。貧富貴賤。延壽夭逝。皆由宿命。奉念彌戒無唐苦者。念彌者。是我身。諸沙門仂行精進。可脫於生老病死憂惱之苦。得應真滅度大道。不能悉行。可得不還頻來溝港之道也。明者深惟。人命無常。恍惚不久。纔壽百歲。或得不得。百歲之中凡更三百時。春夏冬月各更其百也。更千二百月。春夏冬節各更四百月。更三萬六千日。春更萬二千日。夏暑冬寒各萬二千日。百歲之中一日再飯。凡更七萬二千飯。春夏冬日各更二萬四千飯也。并除其為嬰兒乳哺未能飯時。儻懞不飯。或疾病。或瞋恚。或禪或齋。或貧困乏食之時。皆在七萬二千飯中。百歲之中。夜臥除五十歲。為嬰兒時除十歲。病時除十歲。營憂家事及餘事除二十歲。人壽百歲纔得十歲樂耳。佛告諸比丘。吾已說人命。說年說月說日飯食壽命。吾所當為諸比丘說者皆已說之。吾志所求皆

已成也。汝諸比丘志願所求亦當卒之。當於山澤若於宗廟。講經念道無得懈惰。快心之士後無不悔矣。佛説經已。諸比丘無不歡喜。為佛作禮而去。」　(T.03, no. 152, 49b24-50b29)

『法苑珠林』巻 63

「又雜阿含經云。昔者有王名拘獵。國中有樹名羞波提桓。五百六十里圍。下根周匝八百四十里。高四千里。枝四布匝二千里。樹有五果。道有五面。一面者國王與宮内諸伎女共食。二面者大臣百官皆共食之。三面者人民共食之。四面者諸釋道士共食之。五面者飛鳥禽獸共食之。果如升瓶。其味甜如蜜樹。無守者果分不相侵。時人壽八萬四千歳。有九種病。一寒二熱三飢四渴五大便六小便七愛欲八食多九年老。女人年五百歳。爾乃行嫁 (此同彌勒佛出世時也)。」

(T.53, no. 2122, 768a6-16)

[Pali]

AN IV: 7.2.2.10. *Araka-sutta* (AN IV: 136-140)

(Sāvatthinidānaṃ)

Bhūtapubbaṃ bhikkhave, arako nāma satthā ahosi, titthakaro kāmesu vītarāgo: arakassa kho pana bhikkhave, satthuno anekāni sāvakasatāni ahesuṃ. Arako satthā sāvakānaṃ evaṃ dhammaṃ deseti: appakaṃ brāhmaṇā, jīvitaṃ manussānaṃ parittaṃ lahukaṃ bahudukkhaṃ bahupāyāsaṃ mantāya boddhabbaṃ kattabbaṃ kusalaṃ, caritabbaṃ brahmacariyaṃ. Natthi jātassa amaraṇaṃ.

Seyyathāpi brāhmaṇā, tiṇagge ussāvabindu suriye uggacchante khippameva paṭivigacchati na ciraṭṭhitikaṃ hoti, evameva kho brāhmaṇā, ussāvabinadupamaṃ jīvitaṃ manussānaṃ parittaṃ lahukaṃ bahudukkhaṃ bahūpāyāsaṃ, mantāya boddhabbaṃ. Kattabbaṃ kusalaṃ, caritabbaṃ brahmacariyaṃ. Natthi jātassa amaraṇaṃ.

Seyyathāpi brāhmaṇā, thullaphusitake deve vassante udakabubbūḷaṃ khippameva paṭivigacchati na ciraṭṭhitikaṃ hoti, evameva kho brāhmaṇā, udakabubbūḷupamaṃ jīvitaṃ manussānaṃ parittaṃ lahukaṃ bahudukkhaṃ bahūpāyāsaṃ, mantāya boddhabbaṃ. Kattabbaṃ kusalaṃ caritabbaṃ brahmacariyaṃ. Natthi jātassa amaraṇaṃ.

Seyyathāpi brāhmaṇā, udake daṇḍarāji khippaṃ yeva paṭivigacchati, na ciraṭṭhitikā hoti, evam eva kho brāhmaṇā, udake daṇḍarājūpamaṃ jīvitaṃ manussānaṃ parittaṃ lahukaṃ bahudukkhaṃ bahūpāyāsaṃ mantāya boddhabbaṃ kattabbaṃ kusalaṃ caritabbaṃ brahmacariyaṃ.: Natthi jātassa amaraṇaṃ.

Seyyathāpi brāhmaṇā, nadī pabbateyyā dūraṅgamā sīghasotā hārahārīnī natthi so khaṇo vā layo vā muhutto vā yaṃ sātharati, atha kho sā gacchateva vattateva sandateva, evam eva kho brāhmaṇā, nadīpabbateyyupamaṃ jīvitaṃ manussānaṃ parittaṃ lahukaṃ bahudukkhaṃ bahūpāyāsaṃ, mantāya boddhabbaṃ. Kattabbaṃ kusalaṃ caritabbaṃ brahmacariyaṃ. Natthi jātassa amaraṇaṃ.

Seyyathāpi brāhmaṇā, balavā puriso jivhagge kheḷapiṇḍaṃ saññuhitvā appakasireneva vameyya,

evam eva kho brāhmaṇā khelapiṇḍūpamaṃ jīvitaṃ manussānaṃ parittaṃ lahukaṃ bahudukkhaṃ bahūpāyāsaṃ, mantāya boddhabbaṃ. Kattabbaṃ kusalaṃ caritabbaṃ brahmacariyaṃ. Natthi jātassa amaraṇaṃ

Seyyathāpi brāhmaṇā, divasasaṃtatte ayokaṭāhe maṃsapesī pakkhittā khippaṃyeva paṭivigacchati, na ciraṭṭhitikā hoti, evam eva kho brāhmaṇā, maṃsapesūpamaṃ jīvitaṃ manussānaṃ parittaṃ lahukaṃ bahudukkhaṃ bahūpāyāsaṃ, mantāya boddhabbaṃ. Kattabbaṃ kusalaṃ caritabbaṃ brahmacariyaṃ. Natthi jātassa amaraṇaṃ.

Seyyathāpi brāhmaṇā, gāvī vajjhā āghātanaṃ nīyamānā yaññadeva pādaṃ uddharati santikeva hoti vadhassa santikeva maraṇassa, evam eva kho brāhmaṇa, gāvī vajjhūpamaṃ jīvitaṃ manussānaṃ parittaṃ lahukaṃ bahudukkhaṃ bahūpāyāsaṃ mantāya boddhabbaṃ. Kattabbaṃ kusalaṃ, caritabbaṃ brahmacariyaṃ, natthi jātassa amaraṇanti.

Tena kho pana bhikkhave samayena manussānaṃ saṭṭhivassasahassāni āyuppamāṇaṃ ahosi. Pañcavassasatikā kumārikā alampateyyā ahosi. Tena kho pana bhikkhave, samayena manussānaṃ chaḷeva ābādhā ahesuṃ: sītaṃ, uṇhaṃ, jigacchā, pipāsā, uccāro, passāvo. So hi nāma bhikkhave, arako satthā evaṃ dīghāyukesu manussesu evaṃ ciraṭṭitikesu evaṃ appābādhesu sāvakānaṃ evaṃ dhammaṃ desessati:

Appakaṃ brāhmaṇā, jīvitaṃ manussānaṃ parittaṃ lahukaṃ bahudukkhaṃ bahūpāyāsaṃ mantāya khoddhabbaṃ. Kattabbaṃ kusalaṃ, caritabbaṃ brahmacariyaṃ. Natthi jātassa amaraṇanti.

Etarahi kho taṃ bhikkhave, sammā vadamāno vadeyya appakaṃ jīvitaṃ manussānaṃ parittaṃ lahukaṃ bahudukkhaṃ bahūpāyāsaṃ mantāya khoddhabbaṃ. Kattabbaṃ kusalaṃ, caritabbaṃ brahmacariyaṃ. Natthi jātassa amaraṇanti. Etarahi kho bhikkhave, yo ciraṃ jīvati, so vassasataṃ appaṃ vā bhīyyo vā.

Vassasataṃ kho pana bhikkhave, jīvanto tīṇīyeva utusatāni jīvati: utusataṃ hemantānaṃ, utusataṃ gimhānaṃ, utusataṃ vassānaṃ. Tīṇi kho pana bhikkhave, utusatāni jīvanto dvādasayeva māsasatāni jīvati: cattāri māsasatāni hemantānaṃ, cattāri māsasatāni gimhānaṃ, cattāri māsasatāni vassānaṃ. Dvādasaṃ kho, pana bhikkhave, māsasatāni jīvanto catuvīsatiṃ eva addhamāsasatāni jīvati: aṭṭhaddha māsasatāni hemantānaṃ aṭṭhaddhamāsasatāni gimhānaṃ, aṭṭhaddhamāsasatāni vassānaṃ.

Catuvisatiṃ kho pana bhikkhave, aṭṭhaddhamāsasatāni jīvanto chattiṃsaṃyeva ratti sahassāni jīvati: dvādasa rattisahassāni hemantānaṃ, dvādasarattisahassāni gimhānaṃ, dvādasarattisahassāni gimhānaṃ, dvādasarattisahassāni vassānaṃ. Chattiṃsaṃ kho pana bhikkhave, ratti sahassāni jīvanto dvesattatiṃ eva bhattasahassāni bhuñjati: catuvīsati bhattasahassāni hemantānaṃ, catuvīsati bhattasahassāni gimhānaṃ, catuvīsati bhattasahassāni vassānaṃ saddhiṃ mātuthaññāya, saddhiṃ bhattantarāya. Tatirame bhattantarāyā: kupitopi bhattaṃ na bhuñjati, dukkhitopi bhattaṃ na bhuñajati, vyādhitopi bhattaṃ na bhūñjati, uposathikopi bhattaṃ na bhūñjati, alābhakenapi bhattaṃ na bhuñjati.

Iti kho bhikkhave, mayā vassasatāyukassa manussassa āyupi saṅkhātaṃ, āyuppamāṇampi saṅkhātaṃ, utupi saṅkhātā, saṃvaccharāpi saṅkhātā, māsāpi saṅkhātā, addhamāsāpi saṅkhātā, rattipi saṅkhātā,

divāpi saṅkhātā, bhattāpi saṅkhātā, bhattantarāyāpi saṅkhātā.
Yaṃ bhikkhave satthārā karaṇīyaṃ sāvakānaṃ hitesinā anukampakena anukampaṃ upādāya, kataṃ vo taṃ mayā. Etāni bhikkhave, rukkhamūlāni, etāni suññāgārāni. Jhāyatha bhikkhave, māpamādattha, mā pacchā vippaṭisārino ahuvattha. Ayaṃ vo amhākaṃ anusāsanīti.

Sanskrit Fragments Identified as the *Ālánnàjīng* in *SHT*

OGIHARA Hirotoshi

Keywords: Tocharian, *Udānālaṅkāra*, *Ālánnàjīng*, SHT1324 + 1331, SHT1720

Abstract

The Sanskrit fragments kept in the Berlin Turfan Collection with the inventory number SHT1324 + 1331 and SHT1720, which belong to one and the same folio, were identified as the *Ālánnàjīng* 阿蘭那經 (T.01, no. 26, 682b10-684c14) in Chinese in *SHT (VI)* and *(VII)*. In this paper, I will give two other parallel texts to them, namely the *Ālíniànmíjīng* 阿離念彌經 (T.03, no. 152, 49b24-50b29) in the *Liùdùjíjīng* 六度集經 and B3a5-b3 in Tocharian B, and discuss the importance of these Sanskrit fragments to the study on the *Udānālaṅkāra* in Tocharian, the commentary to the *Udānavarga*.

The Tocharian B text corresponding to them is the narrative attached to Udv. I 13-14 and 16 in the *Udānālaṅkāra*. In the notes given in *TochSprR(B) I*, the editors have already pointed out that the *Ālíniànmíjīng* 阿離念彌經 is comparable to this Tocharian B text. However, they did not compare them with the *Ālánnàjīng* 阿蘭那經 and the *Araka-sutta* in Pali which have basically the same topic as them. The comparison among these texts indicates that they are related to the verses given as Udv. I 13-16.

Given that the *Ālánnàjīng* 阿蘭那經 is part of the *Madhyamāgama* in Chinese which belongs to the (Mūla-)Sarvāstivādin, the compiler(s) of the *Udānālaṅkāra* could have used the sutra inherited in the (Mūla-)Sarvāstivādin as the narrative to these verses. On the other hand, SHT1324 + 1331 and SHT1720 are the first fragments in Sanskrit, which are identified as parallels to the *Udānālaṅkāra*, discovered in the Northern rim of the Taklamakan desert where Tocharian Buddhism flourished.

(おぎはら・ひろとし　中国人民大学国学院)